KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

洋学文庫
文庫8
A 149
6

あか　松井ノ錄事　猿戸

いき

ゝく

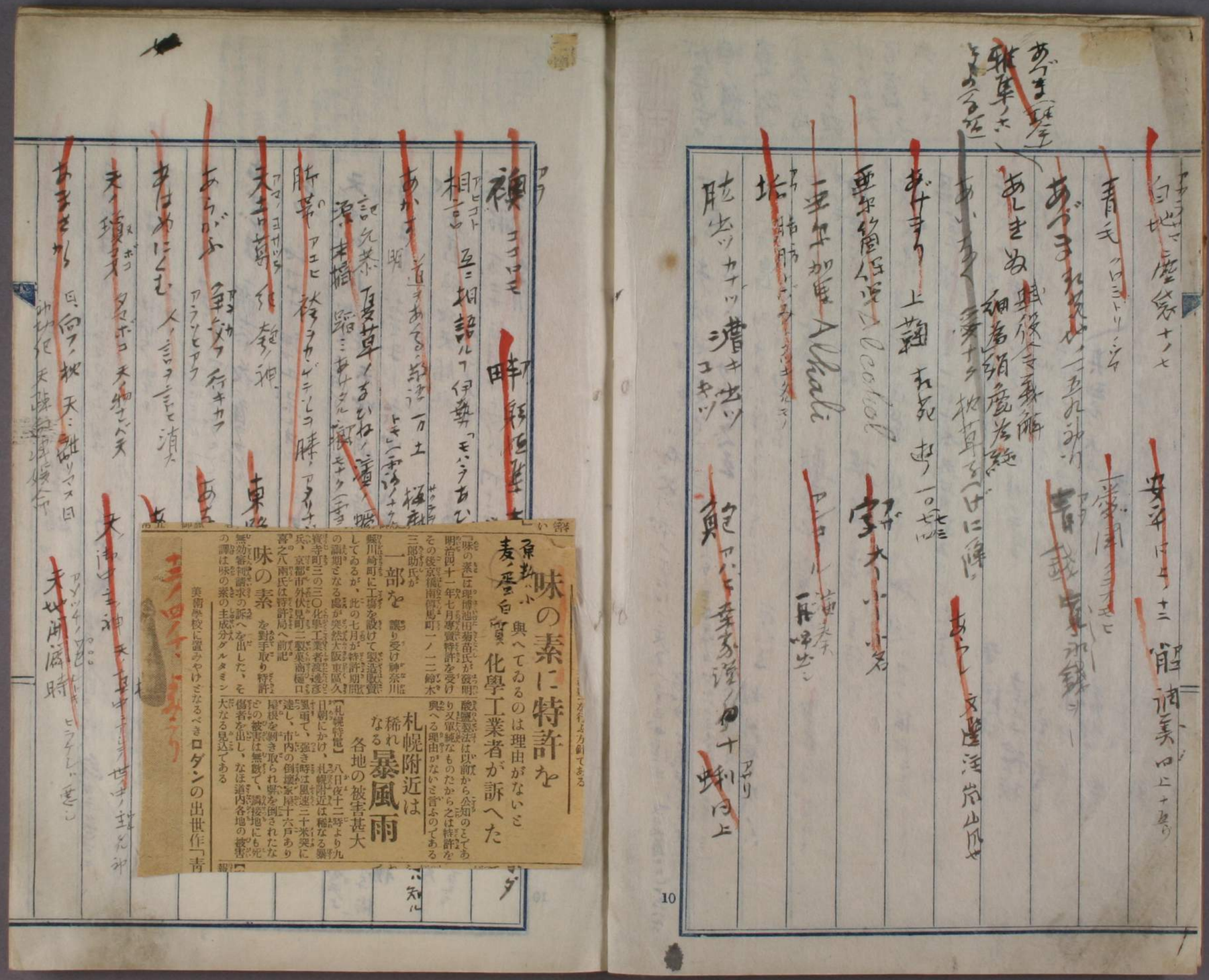
文け

ゝ坊さ

追加

大槻文庫

特
118
199
(6)



味の素に特許を

原料は小麦の蛋白質

興へてゐるのは理由がないと

化學工業者が訴へた

「味の素」は理博池田菊苗氏が發明酸醬製法は以前から公知のものであり又單純なものだから之は特許を與へる理由がないと言ふのである

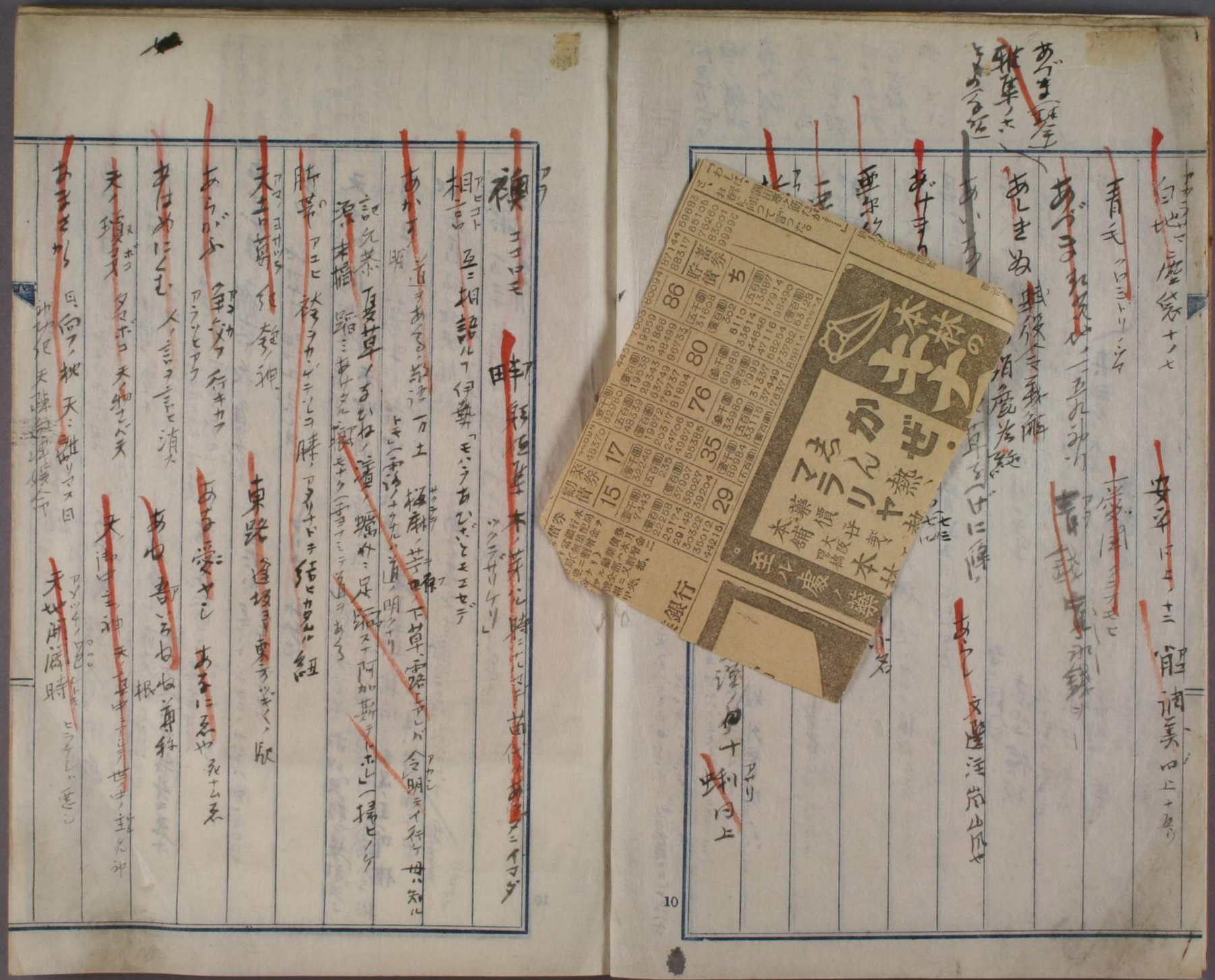
明治四十一年七月專賣特許を受けその後京橋南傳馬町一ノ一三鈴木三郎助氏が一部を譲り受け神奈川縣川崎町に工場を設けて製造販賣してゐるが、此の七月が特許期限の滿期となる處が突然大阪東區久寶寺町三の三〇化學工業者渡邊藤兵、京都市外伏見町二製菓商樋口喜之八兩氏は特許局へ前記味の素を對手取り特許無効審判請求の訴へを出した、その請求は味の素の主成分グルタミン

札幌附近は稀なる暴風雨

各地の被害甚大

【札幌特電】八日夜十二時より九日朝にかけ、札幌附近は稀なる暴雨で、強き時は風速二十米突に達し、市内の倒壊家屋十六戸あり屋根を剝き取られ壁を倒されたなどの被害は無數で、隣接地にも死傷者を出し、なほ道内各地の被害大なる見込である

美術學校に置みやけとなるべきロダンの出世作「青



◇飛島言葉を一ツ二ツ。
ベッタイ——小さい
ミシヤ——見なさい
ビシヨ——便船
ガコ——香の物
ネンパシ——眞綿
ツソ——釣竿
アス（明日）——あくる日の意でなく明る日より數日間を意味し
キノフ——（昨日）も亦前日より過去數日間のことを意味してゐる。（寫眞は飛島不思議の一つ賽の河原の景）

廿二ノ八ノ三 ヨミウリ
羽前ノ日本海
飛島

あけつ言葉 アケマクホレノ墨
羊鶴 アルガ之 舗ノ文郎ヲ好ム、紋カラ色アヒ
あらまほし アラマクホシノ墨 ユカマクホシ ユカマホシ
あやえ
あそはか ○姿ノウルハシキ 或ハ 豊キ
あやまし 画文 物ノ分目ナシ 古今 人目守ル我身ヲ墓
あかまきさ 万十四 逢ナシタヘ ユキチカヒニナル アハタヘ シタモ
あいなだめ アテナキ ハリアヒナソタノム
あ唐 朝ニ香花 首ヲカケル
あたか タラクト、シテアニクサハンデバ倒レモセムヤ
あ化ヤナ シアヘ 剥レオツ
アリナシ 神功紀 ツエテオチサウ
伊拝國御拝 立田川 ア、名ヲコアフ 天ビト 洞ヲ支持スル風
神代紀 大雲 故以天拝ニ挙尊 イサナキ尊ノ息ノ風
まし おぞまし 心ヲ厚クシテン 旅雷カ風流士
具玉 タダマ 手足ノ玉 唱 鈴 かち 機
大島 船 化天鵠船 長ブアクヤキ
あまそぎ 雅言考 百ノ下 玉ノ緒、鏡ノ拍子取リ
雅言考 二百ニ下
明 万二十 ア(?)クニ 同十二 英玉イ 毎月毎

氷果新製法

春が來た。時折うすら寒い風が吹くこともあるが、流石に春の風は既に暖かさが感じられる。日中は小急ぎに歩けば、肌にはうつすらと汗さへにじむ。かうなると、冷い飲み物が欲しくなつて、サイダー、ソーダ水、アイスクリームなどの需要が頻る多くなつて來る。

アイスクリームと言へば、近頃米國ではその製造法について一新法が試みられ。從來のアイスクリームの製法は、鹽と氷と食鹽との混合によつて得られる低温を利用するものであつたが新方法に於いてはその代にエーテルの膨脹性が應用されてゐる。エーテルは、輕い、揮發し易い、燃え易い液體でその揮發を減ずる性質を利用して低く冷藏上の冷却劑として用ひられてゐるものである。

米國の農務省の技師ピー・エス・ペトター氏はアイスクリームを凝らせるにエーテルを用ひその膨脹性を利用することを發案したこの考案によつてエーテルが初めてアイスクリーム製造に應用されたのである。

このアイスクリーム製造にエーテルの利用されたことは、一般の嗜好品の製造に對して新紀元を開いたと言はねばならぬ。一般の飯り飲食店のみならず、一般の家庭に於いても、此の新法は頗る歡迎さるることであらう。何故ならば、エーテルは、氷の如く保存の困難もなく、その取扱ひも至極簡便だからである。

エーテルを膨脹せしむる裝置は、大きなデワーのフラスコが用ひられて、そのフラスコは厚いフエルトで包裝されてゐる。フラスコのコルクの栓には、二本の同心ガラス管がフラスコの中心に達する迄押し込んである。二本のガラス管の間は空氣で滿されて、温度を平均にする様にされてゐる。その中の方のガラス管には膨脹計と寒暖計とが嵌められて、フラスコの中の温度は寒暖計により、エーテルの膨脹率は膨脹計によつて測定することが出來る様になつてゐる。

このアイスクリーム製造器は、米國の非常に荒涼不毛の地方に廣く使用されてゐる。それは、その地方に於いては新鮮した食鹽と氷との混合物を得ることが頗る困難だからである。日本でも、田舎とか離れ島の如き氷の得難い土地では早速應用したら、常に嗜好者のみならず、病人のある家庭、病院等では至極好都合なることであらう。

は三合の牛乳 くまぜて置き 餅と前の蜜柑 蜜柑の搾り汁 用紅と白なし 二滴づつ加へ らせるので カスタードを だけを使つて 冷つた時に白 味を加へ、そ てから冷 味はひを

十二ノ四十七 東京日々新聞

古今 あをやぎ 行キテ見ましハ津風 種々
イテモアリテフ酒ノ小島
翁物注 今人痛甚則
ひきりタマヘ
種ノ後時ニ
野蔵ノ曲
ブン

アイスクリームの拵へ方

暑い、毎日ブツ〳〵と言ひながら、何處かで、そして何かで誰でもが涼を取り度がつてゐる。暑くても涼しい物を欲んでアイスクリームとしませう、普通のヴァニラアイスクリームの製法はもう大方知れ渡つてゐる。ここでは之を拵へてあとの注意すべき點を擧げる事にします。

アイスクリームにするカスタード六合に對して氷七斤鹽二斤乃至四斤位要りませう、氷は出來るだけ細かく碎いて、フリーザーの桶に鹽と氷を押しつけながら一かは宛交互に詰て行きます。内部の容器の蓋は、鹽が誤つて中に入つては折角のアイスクリームが台無しになつてしまふ。

オンス除り中によくまぜて置きます。カスタードは三合の牛乳に鶏卵二個乃至三個と前の蜜柑類を入れて煮て、蜜柑の搾り汁を適し入れ序に食用紅と口なしの汁とをホンの一二滴づつ加へて普通のやうに凍らせるのです。

好みによつては、カスタードを作る時に鶏の黄味だけを使つてカスタードが半分凍つた時に白味を打つて少し砂糖を加へ、それを混ぜ込むと凍つてから宛かもクリームのやうな味はひを深へるのです。

倉敷小學校新川校舎にて

アイスクリームの拵へ方

暑い、暑い、毎日ブツ〳〵と言ひながら、何處かで、そして何かで誤もが涼を取り度がつてゐる。書くものも涼しい物を擬んでアイスクリームとしませう、普通のヴァニラアイスクリームの製法はもう大抵知れ渡つてゐる。でこゝでは之を拵へてあとの注意すべき點を掲げる事にします。

アイスクリームにするカスタード六合に對して氷七斤鹽三斤位至四斤位要りませう、氷は出來るだけ細かく碎いて、フリーザーの桶に鹽と氷を押しつけながら一かは短交互に詰て行きます。內部の容器の蓋は、鹽が誤つて中に入らつては折角のアイスクリームも駄目になりますから氷と鹽とを入れる前にキチンと嵌めて置いて九合目位滿たした時によく冷えたカスタードを入れます。そしてハンドルは緩くりと不同なしに中のクリームが凍るまで廻します。凍つて來る程ハンドルを強すのに骨が折れて來ます。廻らないやうになればそれが出來上つたしるしです。さうしたらハンドルを外して、蓋をあけよく凍つて居たらば、中のダッシャー（中で廻る物）を出して、それに附いたクリームをかき落とし、木のしやもじでよく押しつけてならしたらば蓋をして、蓋の孔へコルクか紙をつめて栓をし、桶には相變らず氷をつめて置きます、そして厚い毛布かフランネルの布を上にかけて桶に密閉して置きますと變らず長い間閉いまゝでをります。

オレンデアイスクリーム

オレンデは目下朝に晩入し來るサン・キスト（西洋蜜柑）を使つて見ます。最初蜜柑二つをよく洗いて皮を（氣孔で）剝して砂糖三オンス（餘り甘によくまぜて置きます。カスタードは三合の牛乳に鷄卵二個乃至三個と前の蜜柑皮を入れて煮て、蜜柑の搾り汁を適し入れ序に食用紅と口なしの汁とをホンの一二滴づつ加へて普通のやうに凍らせるのです。好みによつては、カスタードを作る時に卵の黃味だけを使つてカスタードが半分凍つた時に白味を打つて少し砂糖を加へ、それを混ぜ込むと凍つてから宛かもクリームのやうな味はひを添へるのです。

◇倉敷小學校新川學校宮にてクレコを初め五十餘點なる埃及波斯古陶器も展覽する由

◇福山潤之助氏　八月中旬まで大勝町北下町押田勝五郎方に滯在

◇內田象水氏　鷹島武二氏等の紹介にて國民美術協會會員となる

音樂だより

△レコード音樂會　四日午後六時より神田三崎會館にて

△井上鑑子嬢　目下伯林に在る同女史は近く瑞西方面に赴くと

△琵琶岡上會　新日本樂派の野村景久氏を講師として音樂講座を設けると

△レコードコンサート　來る五日午後より女子音樂學校に於て夏期講習生の慰めに開催すると

◆『層雲』八月號　旅人芭蕉（井泉水）ケルを讀む（蘆江）提灯（裸木）

◆『觀音』八月號　「宗祇を中心とした連歌史」（樋口功）「芭蕉の寂びと佛教の空觀」（明治短歌史論）（水穂）「山家集抄」（大井廣）

◆『香陽』八月號　「宗篤の中より」（白秋）「蜜（八十）」（藤岡伯鶴）「夕暮の一面」（東村）「近詠」（旅家）

◆『素山木』八月號　は一週年記念號として出すと

あやつり言葉

あらまし　アラマクホレノ男
ユカマクホシ　ユカマクホシ

あとはか　はかられる
の空ノ空ルハレキ

あやまち　ユキチカヒニナル
万十四遍てごタメ　ヒタメ

あたま　花ノ首ヲアケル

あたか　タタクト・テアテクサハズ倒レセセムヤ
ツエテオチサウ

あたま　神代ノ大雲雲　故以天狗ノ學者
イサナキ真ノ魚ノ月

あたま　手足ノ玉　鈴カラ鳴
玉ノ緒　鈴ノ拍子用

あたま　二百三十六

あやまち　鶴ノ
あやまち　紋カラ色アヒ
あやまち　猪文目ヲ姓ノ
あやまし　亟又　物ノ分目ナシ
古今人目半ル我身ニ夢ヲ
あいだ　アテナキ
あいだ　ハリアヒナシタイム

あとた　古今ヒ物名ノ人ニ
あぜあしヨトル　たどぶしり　ヲトル

あれつく　古義二ノ八十三

あめつち　天神地祇　アメツチノ国ノ国ノ産明石ノ　あめつち　ヒトリタマヘ
舒明紀五天神地祇ヲ

見御　御幸ニ文御ノ御ノ御ヲ見ヲ　相ノ岡不秀ヲ　深草ノ御時ニ
御幸　朝ヒ踏歌ノ典

兄　キウト

あたま　音ヲ部屋古義ノ人ノ　あたま　音声

あを　都ノ蒼ト夏ガ　あを　飛ヲテビキラナスブンブン

あか赤　哪ト夏ズ

あかれ　散　ハラハラ

ある　意ナル痛ニ悲ス　万　痛醜　漢書東方朔伝注、今人病甚ル
アツ

古今　あを恋し行キテヤ見ヲ　病　病阿
ヘテモアリテテ海ノ神島

（第三種郵便物認可）　大正十二年八月六日　（月曜日）　東京朝日新聞　第四萬三千三百五十八號　（一）

月曜附録

朝顔の話

元來は支那の植物

種類では日本が世界一

理學博士　三宅驥一

朝顔は幾百年とも知れぬ昔、支那から渡來したものである。元藥草として輸入したもので、花を賞翫する爲めでなく、主として種子を採るのが目的であつた。唐來した當時は花の色は淡青と白の二種であつたやうである。ずつと後になつて、元祿時代には、白と淡青の外に濃青、淡紅等の色が出來た。下つて寶政の頃になつて朝顔の種類が殖へ、なるにつれ品種の數も增し、文化文政年代となつて非常の流行を見るに至り、花の色葉の形に於て千差萬別の種類を生じた。

朝顔の榮枯は蓋し安政の頃に至つて、隆盛の極に達し數百數千の品種が出來たが、明治維新の改革ありて、一時衰微して、珍奇なる品種の多數は殆と絶滅せんとする有樣であつた。明治十年頃から次第に回復して、明治二十年以後になつて、年と共に盛んになり、今日では實に、安政時代以上の隆盛を見るに至つた。

朝顔は蔓花植に屬する蔓草で、普通には三実の葉と蔓斗狀の合瓣花を持つて居るが、花の色葉の形は品種によつて、千差萬別で、其の變化奇種に至つては殆ど朝顔と思はれぬものが多い。後培植物の中で朝顔程變化に富み、品種の多いものは、萬だ稀である。先づ葉の形から云へば、普通の葉は心葉で、立田葉は楓の葉のやうに五つに裂れ、花も亦五瓣に裂れて居る。柳葉は柳の葉のやうに細長い葉で、とても朝顔と思はれない。其の花は立田のやうに五瓣に裂れて居るが、其の花弁の縁はずつと滑い。蔓綿の葉は蔓綿長く、葉片の兩邊縁まりて、葉尖剛げ、三実も五実のものもあるが何時でも不規則なる葉形を呈して居る。トンボ葉はトンボの飛んで居るやうな形をして居る。孔雀葉は丸葉に似て其の尖剛細長く宇の葉によく似て居る。

以上述べたのは葉の主なる基本形であるが、此外笹、南天、洲濱、林風等の葉形がある。これ等は皆、傳上から云へば、特別の形質で、種々の基本形と合して千差萬別の葉形を呈するのである。洲濱の形質を有する葉は、先尖らずして、つまる傾向がある。笹なれば其葉縁のやうに、兩邊すぼまり、葉さき尖る。南天は南天の葉のやうに深く切れ込み、兩邊が裏に返る性質がある。又林風は風に吹かれた形から取つた名だと云はれて居るが、葉の付け根が歪む傾あり、葉柄一體不規則である。

葉の地合には蔓、砂摺、綿織、打込等の別がある。蔓は普通の平滑な葉で、砂摺は細かい砂目のやうな粗造の面を有し、綿織は綿織のやうな地合をなし、打込とは所々打ち込んだやうの凹凸がある。

葉とは黄色ばつた普通綠色であるが、黄綠色のものもある。又葉に斑の入ることがある。

斑は其色によりて淡青、白斑、黄斑等の別がある。

朝顔には濃性と云つて特別の形質を持つて居る。濃性の種類は、莖の成長遲く、短と節とが詰つまりて短く、葉もつまりて大ならず、花も其の筒短くつまり、鐘の肉厚く、概して小さい。

朝顔の種類は、實に數百種の多數に達するものがあつて、色だけでも數千種に分けることが出來る。其の上に縞種と云つて縁の白いのや、綾と云つて色々の綾織模樣があるのがある。色は殆ど七色を網羅して居るやうに見えるが、黄色と綠色はない。遺傳學上から云へば、橙色は最も簡單な劣性の色でこれに紫色因子が加はると鼠色になるし、最も簡單なる優性色である。紅色に紫色因子が加はると、紫色となり、これに更に青色因子が加はると藍色となる。この藍色は即ち青い色は遺傳學上から云へば最も複雜なる色である。

朝顔の花には大別すると平咲、八重咲、蔓咲の三種がある、平咲は普通の花であるが、時とすると立田葉、笹葉等を持つて居る品種で見き雄蕊、雌蕊も大抵は雌に變化して、牡蠣の花のやうな、にぎやかな八重を呈するのである。花の大さは普通の品種では直徑が三寸から四寸位であるが、大輪と云つて大形の花では、五寸以上六、七寸に達するものがある。次に花の色は紅色、紅色、紫色、藍色、鼠色、白色、橙色等あり、其體に濃淡の別があつて、色だけでも數千種に分けることが出來る。其の上に縞種、綾種等を持つて居る品種の數を加へて、如何なる品種でも此の遺傳質の表現であつて、一種奇形の八重咲のやうな花が出來、花瓣自身も往々細く切れて、一種奇形の八重咲のやうな花を開くものであるし、其の仙種々の變り物もあるが、餘り長くなるから略することゝする。

朝顔は支那の植物ではあるが、今日我國で栽培して居る品種の數を遙かに支那を凌駕し、其の美しい珍奇なる種類に富んで居る點は世界一と云つてもよい。歐米では所謂西洋朝顔は多少栽培して居るが、普通の朝顔は夏期の溫度の低い國では殆ど栽培して居ない。日本でも仙臺以北は溫度の關係から朝顔の栽培に餘り適せない。

アップル　文明全書、平凡社、七ノ十七ノ三ワ　　猷勝　考古学雑誌十三ノ十二ノ八五　大正十二六五
あたら　可惜　傷ト迎スルカ　　安坐　アグラカク、盤坐
あたらし　新　新鮮ナル　可惜　可愛　　あぐらもコリモ坐ル　らちクチモナイ
あさかち　「獅「甚」
あやにく　猷勝銭　西洋ニアラズ支那ニテ道教ニテ呪文の積ルル文、（悪鬼ヲ避ケ
あやにく　轉モノ、長命富貴ナドノ吉語ヲ、外国ニテ描ニテ鑄造　考古学雑誌十三ノ十ノ六八五
鐙　ツアフミ、ツボアフミ　同上十三ノ九ノ六〇二

天羽衣　御沐浴ノ御帷子　丹後風土記ノ天女ノ井ニ浴ミ天羽衣ニ着タ電ム古事
案内　昨日九今日の物語（　）サキヤ　御命講ヲ勤ムトテ寺より案内アル
叉　あた　百手培ヘ　信友随筆ノ叉ノ下二十
あらぐまし　アラガラシ　ヲコガマシ　　あらひた　サヅ、サクヅ
あれをとめ　（齋院ノ賀茂ノみき　安礼乎止女　イツキノミヤ　　あせ　畔　北肖　畔　あ下　郎伯年　（同　畔畔）
あそぶ　遊学ノ　訓読ノ字典　　ヤマトコトバ字典（三）
足軽　さかしき、盛衰記　　アトヒサリ　沙嫁　サリガニオヅリガシキリ
あらみたま　幸ノさきたま　百科ノをまみたま　　縣亜　県亜
あきづく　秋就　古義十ノ下ノ八五
あらまき　荒巻　鮭ノ塩引ノウスモキノ事　（辣蘸　義カ　アラマキ　　根室ノ西別ノ鮭ヲ最上トス　鷹ノ前ノシナヒモノノ信ナリ

あとゝ　千住ニあつまるに付
俳諧指要抜書入

ポスト　前　Apostle
耶蘇真宗の使徒

あを山　青山　言別二十上

あゝ　神代化上ハ、意地
アテ白しゝや

あわゆき　言別れ上

あづち川　アヅチ
ヨミト

あだた駅　言別三五

あり　宮あり　狂言未詳ヶ三十人ノ妻ヒキクヒヨイコトモアリ
又、アモイコトモアん

あれつく　万古ノ七五才

あはしがき　浮ノ　さはを、さはしがき　見合

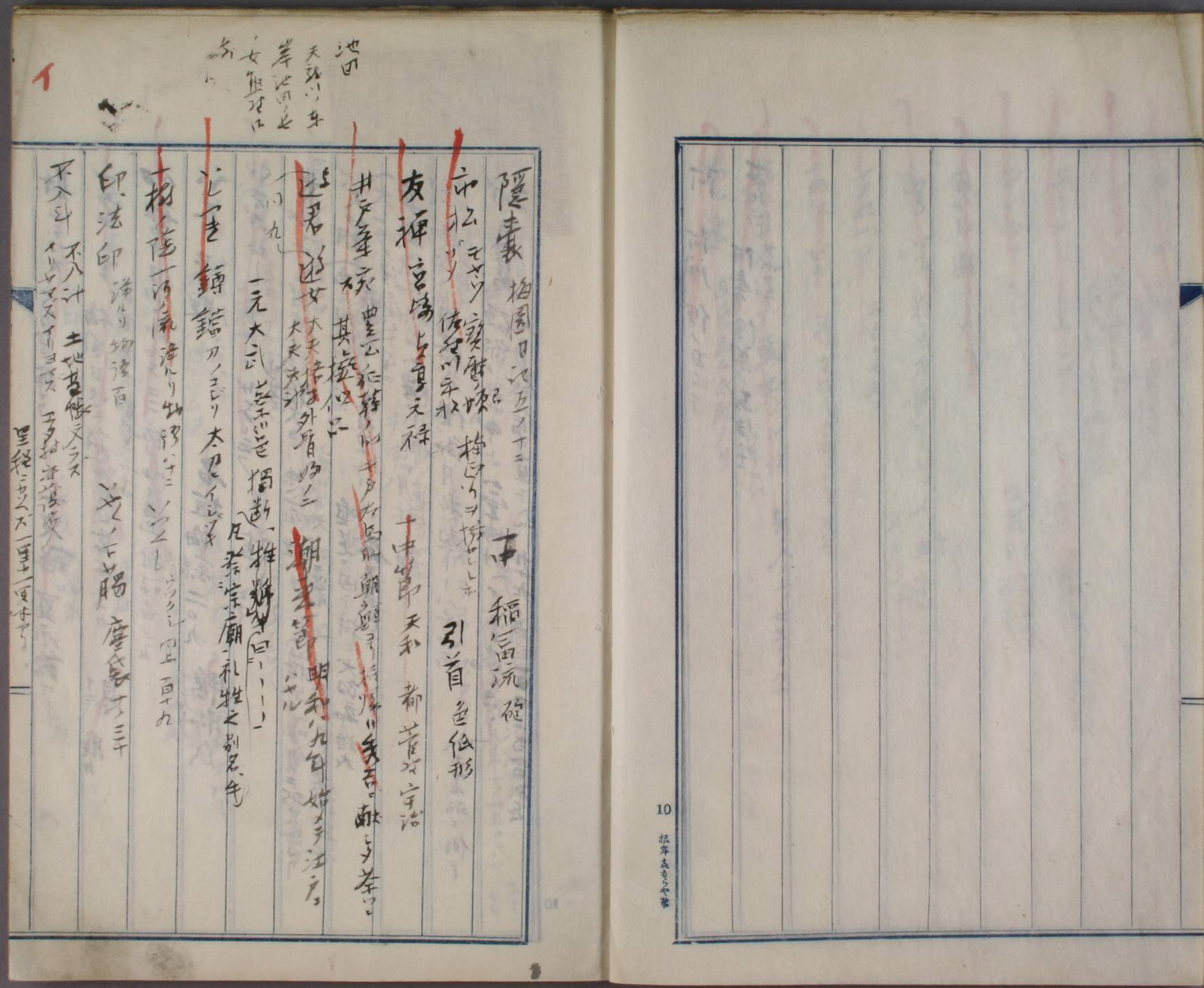
あまま　ひな　東夷ノ刊行
トウイ
翌ヶ外

新人ノ三七五ノ分

あし妻　武男助千代　列天皇

阿　阿弥　俳ノ名二下

あこう　阿房　俳諧ノ名ハ八十一
アホウ



隠棲　梅園日記五ノ十二

中　稲富流砲

和松　モヤウ　変化ノ姿　梅ヲ

友禅　宮崎与重文禄

引首　色紙形

中巻　天和　都萩宇治

井戸茶碗　豊公拝領ノ由　其後以上

辻君　遊女　大夫格外有物ノ二　大夫太夫

潮来節　明和九年　始メテ江戸ノ

一元大元　芸者ハ　猫断　牡丹

ハヤル

ハ九

しつき　鍾馗　鎧カノコヒリ　太刀イビツ

柳ノ陰　一対　流浪ノ仙人　ソンシ　ウクイ　四上　百十九

印法印　流浪ノ物語百

文ノ下　瞞　慶長十ノ三十

不入斗　不入斗　土地名　天ノ

イリヤマス　イリヤマス　エラボ　ヤ

射レテセス　くろむに酔り　　十支録　直元鈔ヲ一

十字 字　梅園日記三銭華字之二ヌ四 十六カ　　息 イキ　朧カ

伊勢ヤ日向ノ物語　手帖ノ四ノ巻山雑誌ノ四上五

いろ 呂脏　　市垣海録 二〇九　　鴨 イキナリ 勝氏

むまおむし　離ハスサヤシテ　　陰門ヒキト

犬張子　諸侯ノ娯楽　狗犬ヨリ 忠実ノ性ナ　岩田家文ノ日ニ出ル　　蒔物ヲ喰ヒ犬ニ巧九所より 履番探偵

犬箱　（出産ノ時ニ用ヰル　犬ハ産ヲ軽クスル　喰ヒ是ニ因テ持ニ犬ヲ用持大）

（大キナ）鼻戯　路ニ伏シテ居テ　似系歌者　大幅ノ櫃ノ胡麻ノ要　原ヲ架トス

熱海ノ風　内膳式　供御月料　熱ノ一八斤四両

稲負鳥　古来ノ歌ノ上　人々ノ家ニ稲ヲ負ハセテ入ル　八雲御抄ヘイナオホセトナヅケテアリ　九ノ上　百四上古留別志　　古今集羽ニ倒テ

10

一個の害分された（石巻特派員發）
稲荷穂に放火　去月二十九日午前一時三十分頃登米郡北方村字北浦十堤の内五百五十四番地農佐藤長三郎方に於て田内に積んで置いた稲荷穂より發火し二個を燒失して鎭火した原因について佐沼警察分署に於て檢證の結果放火の疑ひがあり目下犯人嚴探中である

ノ昔サレ貝拾フコトヲ　道ニ出デヽーヲ見ケル　　一向宗 昴澄ノ末流 燈明ニ 作者大坂ノ人 一三〇六中ノ巻

ヲ生ケオク　辛家ノ涯ノ　入リウガチ　偏齣ノ身ヲリアハレナレ　　今様　コノゴロヤウ、タウセイフウ

か　　そまだ

おいて苦しき事ヲ　モヤクタイ　　いびつ　ユガミナリ

黒心　コヽロ　　小ヤカラ 鳴勝ヲ チチエスイヤ　ア大キニ居ル　セブ

いまだ　コトバアラソヒ　口論　　いぬころ　呼ブ子ノエロノ

いろね　篋注　たのかみ　同母兄姉　いろは　　出水泉　播磨土記　揖保郡出水里

小春　小六月　　いかが　五月ノときノ候ノ歌ノ典

いひとよ　嘯声ニテモアルカ　　いかまか　嘯声

いとど　竈馬　ニギス　　いたち　鼬　嘯声

射ヒラヒス くろむこ 鋤さ

十字 字 梅園日記 合九七 数量一寸

伊勢ヤ日記ニ 恒ノ四五山 雑法ノ四上五

いな 吾脱

むさぼし 鋤ナ ケラ ヒ

犬張子 諸ノ慎 狼大きり 忠実ノ性ナ

犬箱 出羽ノ国ニ 犬ノ毛ニ 犬ノ毛ニ 犬ノ毛ニ

鼻緒 犬ノ毛ニ 犬ノ毛ニ 犬ノ毛ニ

熱海ノ絵 内膳公 供 御月新 熱海ノ絵

稲負島 石絵ノ 人々ノ多 稲ノ豆ニ

市垣 海藻 二〇九 鴨 イチウ 明氏

隠ハ上ト

藤ノ 唯ノ 唯ノ 唯ノ 唯ノ 唯ノ 唯ノ 唯ノ

隠密 探偵

上ノ 雲南ヘ イヒヨナツルヒ

九九ノ上 百四上ノ留別

十文字 宝元録ヲ

息 脱カ

砌 今昔ハ 貝 拾コトヲ

滝 末法燈明記 体者大 数量一ノ三〇六中ノ

池 魚ヲ生ケスク 幸 泉 注 ヲ

いりほが 入リウガチ 便 部ノ 身ヲ ヒ

いしのまど 石ノ

いびつ ユガミ

ヒヤククイ

異心 コトコロ

いきすだま コトバアラソ

ナルコ 諍 ヒ

ヒ ヒ

いろね 養 注 ナノカミ 同母兄妹 イロハ

小春 六月

生水泉 播磨生ヒ 揖保郡出水里

いしとよ 嘯声 ニテ アルカ

ハカ 嘯カ 嘯声

いとど 蓮島 ヲ

ヒ ヒ 嘯 嘯声

最新

いとまし 後ろ向き

いちじるし 著し 著

木綿 幸吉 新法 十三ノ九ノ五九九

いく 幾 数ヲ問フ語 幾許 イクバク 幾分 幾

一切経 一般 伽藍 百畳下 想像

一門 ナラ 法隆寺二十四ノ三九

一上 寺院 三井寺ノ長官ノ第一

大和 法隆寺 大和ノ法隆寺ノ九ノ五十

いへ 函 函 れノ器ノ二ノ九七二 刀室 九七三ノ平家

伊勢人 伊勢ノ国 滑稽 ナ ヲ ノ家

一方 一番

いとまき 郵便局 一等一 三 松

いちばん 一番 二ノ三ノ九ノ

一番目 二ノ三ノ

一番鶏 二ノ三ノ

一番手 二ノ

いったうさえら 一切三礼 三礼ヲ見ヨ

色敵 サカヤテ

インフェルノ 地獄 Inferno

一番士 世界 仏教 七

今内裏 里内裏 住ノ

ヰザリ 三百 ヰザリ 三百

いね 稲 真根 接 稲(田根)

いろざと 祀ノさと

今迄心 アヨダシ

いぶせし キブッセイ シンキクサイ

いとけ 幼稚 地獄クレ

五日帰 里帰 住ヲ

一番士 世界 仏教 七

百 百ノ三ノ

ラセハ八百　マンバイ、ヤンミツ

紙波　外貨ハ二

乾比丘尼　外貨ハ二

牛　下四ノ私婚ノ義ノ揉不ヨクシ神ルカト云フ

草細　海ノリ和法　五十五　紫緑マデ

馬　果下馬

うを　ケオサル、ハマルヽ

外良瓜　けすりヲ見ヨ　（こうるらうヲ見ヨ）

梁　幸家　灌法抄五ヲ見ヨ

うを　ケン　ウレフ

胡乱　ヒヤウ　ウレフ　撓ノ中　故乱

古梅の樹　江戸四谷　柘木ノ近　王寺ヨリ出　武田右近ノ屋敷ヨリ出　此種名ヨシ

梅茶　外貨ハ十　天外モ廿五

浮身箱　内十二

有海亟海　海ノリ　外法ハ二

卯花絨　内上　百十九

俳徒　乗中　俳ヨリ　外法ノ見ル

梁　梅ノ外法ハ二ル　梅ヲ見ヨトコロ

薄茶　ぢく　ぎうへ　ヲ書

甚至　幸家　法抄五

消化を助ける。そしてこしてあるそして運動を必ず毎日するこミである

夏向きの家庭料理

安くてうまくて簡單に出來る

（中）　青山側堂講習會　宇多繁野氏

◇小鰺うしほ煮

食慾をつける

材料は小鰺、大根、ねぎで此うしほ煮も食慾が進めます調理方は三寸位の小鰺のコケを取り三枚にオロシ上身となし鹽をフリ五分以上十分間置く注意鯖鰺の類は鹽をあて、一時間以上置くと減に絡構です、急く時は五分か十分でもよろしい少し鹽を多くふります。

別に鍋で出しを煮て其中へ鹽をして置きし小鰺の身をサッと水で洗ひ熱いたしの中に入れて五分間煮ます。鹽をしてある魚から鹽かけんが出ますが、かけんを見て甘い様でしたら擂鹽少し御入れなさい同大根を細くせんに打ち入れて、置きますさらしねぎ添へて出します。其さらしねぎかこしらえますのはねぎを白い處も青い處も一番に極細かくきざみふきんにつゝみ又ヌカ袋とも直様こしてねばりをとり三度程水をかへしぼりますとねばりも取れきれいになります。

◇ウイルスープ

見榮えもよい

鰻のさきましたのを、小口から二三分位びに切りお鹽を少し致しまして五分位置きます。別にスープお煮出汁をお湯にてわかしまし

た中へお鹽をいたしましたうなぎを入れて一寸煮ます。それにお鹽を胡椒で加減をしてスープ皿に鰻七切程とそのお汁を好い加減に入れて出します時さらし葱少々のせて供します。

さらしねぎのこしらへ法はおねぎの白い所と青い所をまぜ合せ小口から小さくわ切りに切りまして、布きんに包みぬか袋をもも様に二三度もみましておねぎのぬめを取り去り強い（シウキ）もなく成り見はゐも大そう美しう御座います。（生おねぎは脳の榮養に成ります）

子供の知識

吉凶を占ふ

うどんげの花

今日はウドンゲの話をしませう丁度今頃から真夏にかけて木の葉や天井や鍋の笠などに草カゲロウと云ふ青い美しい透きとほる羽を持つた虫が何本かの白い細い糸の端に極小さい白い卵を産み付けますがそれを俗にウドンゲと云ふのです、草カゲロウは非常に命の短い虫でこれから夜よく電燈の所に飛んで來てクルクル飛び廻つて居ます、雌が卵を産む時はお尻をピタと天井や笠に付けてすぐ上にあげるがその時お尻からクモの糸の様に白い糸が出ますそしてその一番端に卵をつけるのです世間の人はウドンゲが家に沢山出ますと非常によいことがあるとか又は病人や死人が出来るなどと云つて赤飯などを炊いてお祝したり又おまじなひをしたりします

いたちにとられて十二ノ死びました きのふのはんによみうり死にました

科學と發明

ヴイタミンの製造もと（三）

——植物の特權——

ヴイタミン說は学說としてはなばなしいものであり、学者の実驗としてはまた有るか無いかの少量な物質が動物を肥えさせ癒せさせ孕せもしくは病氣にしたりなどするのでお面白い実驗ではあるものゝ、しかし普通の大人にあつてはこれが爲に從來の食物を激変するの必要を生じてをらない。

ヴイタミンが無ければ如何に多量にその他の營養分をとつても健康の妨へることは確認されてるが、しかしヴイタミンは普通の野菜にも果実にも肉類、乳及び穀物などにも含有してゐる。なるべく献立を複雜にさへしてゐればヴイタミン欠乏の恐れは起らぬ。たゞ小兒とか病人とか長期の航海とか軍隊とかもしくは家畜などの食物について、だけ特に注意を要するに過ぎない。

ところで、動物の身體にはあまねくヴイタミンがあるにもかゝはらず、動物はヴイタミンを製造することは概ね不可能なものであるとされてゐる。ヴイタミンは動物の体内にあるものも悉く植物から来てゐるのである。

この点は肝油のヴイタミンについては筋道が明白に判明してゐるが、これは最初は硅藻といふ下等植物が製造してゐる。硅藻とは水中の石や木などにヌラ〳〵と着いてゐる微細なものだが、これが光線の力を用ゐてヴイタミンを作りつゝ生活してゐると、それを水中に浮動してゐる微細な動物がとつて食ひ、この動物は水には小魚に食はれる。タラはこれ等の小魚を餌食とし、それと共に硅藻の製造したヴイタミンAをとり入れるのであるが、このヴイタミンは結局は肝臓の脂肪中に落ち着くことになつてゐる。

C種のヴイタミンも植物に始まり豌豆などが発芽するとき寄くなるに先だつて発生してゐる。たゞB種のものが酵母菌に多いのは或は光線の力を待たないでも作られるものかとも疑はれてゐるが、とにかくこれも製造術が植物であることは否定できない。

つまり肉類などのヴイタミンの分量は全然食物の種類によるわけで、牛乳は牛の秣の関係上冬よりも夏の方がヴイタミンの多量であることが実證されてゐる（完）

白靴防水クリーム　フオムスA　一瓶

高ノ巌

うむ 埋[illegible]

うはまの 雅三郎 二百九下

うべかく 四百十上

うちあげ 四百十上

うけひかり 記 仲哀 宇豆[illegible]

うまのひ 馬匂 雅三郎 二百十上

うかひ 鵜飼 四百十二下

うきき 四百[illegible]

うたたね 二百十二上

うとり 鵜河 四百

うだつ 炭 四百五上

うたてき 養蚕 四百十五下

うぢ 氏生 四百十上

うづ 炭 四百十六上

うち 臼搗 四百十六上

うちはへて 四百十七上

うひ初 四百十七上 宇比

うはし 時 四百十七上

雅集要 十九ノ末

うらぶし 裏屋 拙稿 [illegible]

うるさ 北斗 [illegible]

うちのエ 内匠 氏長 氏首

うめ 梅 梅ヶ山

うねび 温ノ 秋 八

うちぎ 三宝 袿人 見

井 温泉

うめく 梅 [illegible]

うたふ所 [illegible]

うむ借 四上

薄馬鹿 [illegible]

科學と發明

ヴイタミンの製造もど（三）

——植物の特權——

ヴイタミン說は学說としてははなばなしいものであり、学者の実験としてはまた有るか無いかの少量な物質が動物を肥えさせ精せさせ孕せもしくは病氣にしたりなどするので頗る面白い実驗ではあるものゝ、しかし普通の大人にあつてはこれが爲に從來の食物を激変する必要を生じてをらない。

ヴイタミンが無ければ如何に多量にその他の營養分をとつても健康の要へることは確證されてるが、しかしヴイタミンは普通の野菜にも果実にも肉類、乳及び穀物などにも含有してゐる。なるべく献立を複雜にさへしてゐればヴイタミン欠乏の恐れは起らぬ。たゞ小兒とか病人とか長期の航海とか軍隊とかもしくは家畜などの食物について特に注意を要するに過ぎない。

ところで、動物の身體にはあまねくヴイタミンがあるにもかゝはらず、動物はヴイタミンを製造することは概ね不可能なものであるとされてゐる。ヴイタミンは動物の体内にあるものも悉く植物から來てゐるのである。

この点は肝油のヴイタミンについては筋道が明白に判明してゐるが、これは最初は硅藻といふ下等植物が製造してゐる。硅藻とは水中の石や木などにヌラ〳〵と溜いてゐる微細なものだが、これが光線の力を用ゐてヴイタミンを作りつゝ生活してゐると、それを水中に浮動してゐる微細な動物がとつて食ひ、この動物は水には小魚に食はれる。タラはこれ等の小魚を餌食とし、それと共に硅藻の製造したヴイタミンAをとり入れるのであるが、このヴイタミンは結局は肝臓の脂肪中に落ち着くことになつてゐる。

C種のヴイタミンも植物に結まり豌豆などが発芽するとき河くなるに先だつて発生してゐる。たゞB種のものが酵母菌に多いのは或は光線の力を待たないでも作られるものかとも疑はれてゐるが、とにかくこれも製造所が植物であることは否定できない。

つまり肉類などのヴイタミンの分量は全然食物の種類によるわけで、牛乳は牛の秣の関係上冬よりも夏の方がヴイタミンの多量であることが実證されてゐる（完）

医学士 原田[illegible]

白靴防水クリーム フォムスA 一瓶

高ノ巖

うむ 埋井田敷 概ネ一山家清 ノ中ノ山

うはまの 雅三 考三百九下 えべす 四三百十上

うちあげ 四三百十上 うだけ 四

うけひかり 記 仲哀宇豫橋 曰若事既 事必獲 國

うまかひ 馬飼 雅三考三百 ウカヒ 鵜飼 四三百十二下

うきき 四上 三百十二上 鵜河 四右

うたたね

うぶすな 養ノ

うづ 炭 四三百

うひかね 三

雅集要 十九ノ末

うらばしり

うるさなぎ 水者

うちのエ 四ノ末 氏長 氏

うめ 梅 梅ハ山生ノモノニアラズ 西土ヨリ渡サル種ナリ

うねざし 温ノ 秋 八

うちぎ 三 裡人 見ミ

井 温 蓄

うめく

うるす 雅集 ウラヤサン

うたふ所 四上 うるさし

うむ借 四上

嘯 ウソブク 雅集ニ千五十三

子 蓋 群

一鹿 四コバカ 低 低ハ小ノ

運上 蓋 記三ノ二九八下

ヴィタミンAとは何か

（上）榮養素として大流行

薬學士　橋爪恵氏

ニュートンからアインシュタインへ、水平社運動から、共産協商へ世相がそれから夫れへと移つて一大流行は明かたらうと思ひます。現にこのAヴィタミンが、榮學の研究に熱心な理化學研究所と、鹽床醫家を母體とする三共株式會社の二大地盤から世の流行態に純然たる食物として提供されたが以上は少くも何者鳥や黒鯨の類でないといふ臆想を抱かすには居られますまい。Bヴィタミンは最早鈴木梅太郎博士のオリザニンといふ脚氣藥

人口に膾炙

されてある筈ですが、最近の流行兒Aヴィタミンの大口膾炙程度は口にこそ喧傳されてゐますが、その正體は意外にも至つて稀薄なものであります。Aヴィタミンはオレーフ油などの脂肪に溶けるところからこれを脂肪溶性Aといつたり或は又動物の生成に必要な榮養素であるといふ事實から成長ヴィタミンとも

呼んでゐます。

例へばAヴィタミンの缺乏した食物で養つた動物の發育は大變不良であるばかりでなく一般の病原菌に對する抵抗力が極めて鈍るといふことです。では一體どんな食物に多いかといふと、それは一般に黄色味を帶びた動物性の食物であることが分つてゐます。例へばバタ、卵の黄味、生乳

魚油や肝油

クリームなどの類です。有りさうで無いのはラードや脂肪であります

ゆくやうに

榮養の方面

も亦何者鳥からカルチウムへ、カルチウムからヴィタミンへと、人間世界は時雨にも増した慌ただしさを見せてゐます。殊に近頃の流行兒はヴィタミンABCDのうち、何でもいゝからAに限られてゐます。何處へ行つてもこの流行兒で持ち切りといふ有樣です。科學の生産物に對して流行兒呼ばはりは怪しからぬことかも知れないが更し角

寺橋の下流、大久保橋の字田

といふ家では、人通りの多い家のワキへ「都焚附け一袋十錢、お入用の方は此樽の中へ金を入れて自由にお持ち歸り下さい」と書いた紙の前へ、その焚附けをどつさり並べておきます◇近所のおかみさんや、通りかゝりの婦人方が、その書いた物の命ずる通り、金を樽に入れては、焚附けを持つて行く、また一度も失敬された事がないさうです◇下層の人々が多い、と云はれる木所深川に、かうした道義の保たれてゐるのは嬉しい事ではありませんか

りあく通く刻み画もみして下にて

ビタミンAとは何か（下）

新劑は肝油から製出

藥學士　橋爪　惠氏

Aヴィタミンが動物の生活に大切なことは米國の或る地方の牧場を觀ても分るといふことです。そこには漢山なほうれんさうやキャベージが殖ゞ

野生の儘に

あり從つて其土を踏む牛や羊の成長度は他の地方のに較べて非常に優れてゐるといふのです。殊に鷄の產卵數の多いのは驚く程だと聽きます。近頃心ある人々の間に盛んに肝油の服用が流行してゐますが、これも慌しい生活に追はれる必然の保健政策でせう。然し惜しいことに

藥

◆本所と深川とをつなぐ「みろく寺橋」の下流、大久保橋傍の字田

といふ家では、

人通りの多い家のワキへ「郵便附け一袋十錢、お入用の方は此樽の中へ金を入れて自由にお持ち歸り下さい」と書いた紙の前へ、その郵便附けをこつさり並べておきます◇近所のおかみさんや、通りかゝりの婦人方が、その書いた物の命ずる通り、金を樽に入れては、郵便附けを持つて行く、また一度も失敬された事がないさうです◇下層の人々が多い、と云はれる本所深川に、かうした道義の保たれてゐるのは嬉しい事ではありませんか

切なことは米國の或る地方の牧場を觀ても分るといふことです。そこには漢山なほうれんさうやキャベージが殖ゞ

野生の儘に

あり從つて其土を踏む牛や羊の成長度は他の地方のに較べて非常に優れてゐるといふのです。殊に鷄の產卵數の多いのは驚く程だと聽きます。近頃心ある人々の間に盛んに肝油の服用が流行してゐますが、これも慌しい生活に追はれる必然の保健政策でせう。然し惜しいことに

藥

◆本所と深川とをつなぐ「みろく寺橋」の下流、大久保橋傍の字田

といふ家では、

人通りの多い家のワキへ「郵便附け一袋十錢、お入用の方は此樽の中へ金を入れて自由にお持ち歸り下さい」と書いた紙の前へ、その郵便附けをこつさり並べておきます◇近所のおかみさんや、通りかゝりの婦人方が、その書いた物の命ずる通り、金を樽に入れては、郵便附けを持つて行く、また一度も失敬された事がないさうです◇下層の人々が多い、と云はれる本所深川に、かうした道義の保たれてゐるのは嬉しい事ではありませんか

切なことは米國の或る地方の牧場を觀ても分るといふことです。そこには漢山なほうれんさうやキャベージが殖ゞ

野生の儘に

あり從つて其土を踏む牛や羊の成長度は他の地方のに較べて非常に優れてゐるといふのです。殊に鷄の產卵數の多いのは驚く程だと聽きます。近頃心ある人々の間に盛んに肝油の服用が流行してゐますが、これも慌しい生活に追はれる必然の保健政策でせう。然し惜しいことに

藥

◆本所と深川とをつなぐ「みろく寺橋」の下流、大久保橋傍の字田

といふ家では、

人通りの多い家のワキへ「郵便附け一袋十錢、お入用の方は此樽の中へ金を入れて自由にお持ち歸り下さい」と書いた紙の前へ、その郵便附けをこつさり並べておきます◇近所のおかみさんや、通りかゝりの婦人方が、その書いた物の命ずる通り、金を樽に入れては、郵便附けを持つて行く、また一度も失敬された事がないさうです◇下層の人々が多い、と云はれる本所深川に、かうした道義の保たれてゐるのは嬉しい事ではありませんか

藥

◆本所と深川とをつなぐ「みろく寺橋」の下流、大久保橋傍の字田

といふ家では、

人通りの多い家のワキへ「郵便附け一袋十錢、お入用の方は此樽の中へ金を入れて自由にお持ち歸り下さい」と書いた紙の前へ、その郵便附けをこつさり並べておきます◇近所のおかみさんや、通りかゝりの婦人方が、その書いた物の命ずる通り、金を樽に入れては、郵便附けを持つて行く、また一度も失敬された事がないさうです◇下層の人々が多い、と云はれる本所深川に、かうした道義の保たれてゐるのは嬉しい事ではありませんか

藥

◆本所と深川とをつなぐ「みろく寺橋」の下流、大久保橋傍の字田

といふ家では、

人通りの多い家のワキへ「郵便附け一袋十錢、お入用の方は此樽の中へ金を入れて自由にお持ち歸り下さい」と書いた紙の前へ、その郵便附けをこつさり並べておきます◇近所のおかみさんや、通りかゝりの婦人方が、その書いた物の命ずる通り、金を樽に入れては、郵便附けを持つて行く、また一度も失敬された事がないさうです◇下層の人々が多い、と云はれる本所深川に、かうした道義の保たれてゐるのは嬉しい事ではありませんか

う 諸ウン

うづ[illegible] 蹲踞 尻ヲ地ニツケ西膝ヲ立ツル

うつたへ[illegible] ヒタスラモツパラ カレーニトリハバカネド

さらくに 十二巻十冊 著作 四巻 二冊

うあけへて イツマデモ 古今ナセ 后月花

姓氏 紅大系ノ三三ヲ まヲ三ヲ

うまぶ[illegible] 作り馬蹄 見られ[illegible]ル 運用 ツヒヤウケ

うかがひあし 俚集 土佐あし サヅリアシ 百五十四ヲ二アン

うぶや 産屋 産所、産室、産屋 うみさち 海幸 さち(幸)ノ條ヲ

うどんげ 世界花 俚[illegible]のヒ三二ト うしあだ 後屋

うれたし 三ヲ廿二上 うるさし 五月蠅 又ハ 古源左死 ヒヘヤスヲ見ヨ

松本文庫

文鰍 上 ざこし條ヲ

右僧射 ほうや條ヲ

うたよみどり 歌鳥 初陽 毎朝ヲ見ヨ

うなばら 海原 海原 ウミハラ、ウナバラ、水上ニナカミ 原ノ原ヲタヒラナルヲト

浮草 アラジキクサ 百科三ノ八ヲ

図助（ずいしゅん） 半助 玉助 花助 蕎奴（テコヅル） 一図助一図ミテコロブ

明治二十四年

えびすゝしきゞ 海老茶式部 袴式部 外骨五六

熱中 熱中（キツヒヒ）ニ成ル人ヲ一緒ニ組付ル 細川熱中先生

回向 功徳ヲ積ミ其果報ノ色ヒロ回リ白ヒ来ル ソレヲ他ニ向ケテ供養ス

炎紅 浄瑠璃物語 七十 喧嘩雑 **縁結之へのゆみ** 清水物語七十一

忍ぶ 、雀賊 がさ、（アリト雀本稿ニカヽル） **腰敷**（コシツキ） 脱（コミツキ）

永乗錢 永錢一代一高、永淫ヒリ運搬ヲ取

俵的 俵的見 **様大** 大だゝ 百姓漬

元せぬ 雑三考 二百廿八ト 元せぬ（ゼニ）二百廿九ト 元せ、 元せ、 元せ、二百廿上 元だゝ

元一き 移調ロ 元うなき ロ 元びかゝゞ 元ゞし ロ 二百廿九 元ゞ

えひめ、えとめ 枕草子二百十九下

えだは　えにし 縁しい 円

えやみ 二百三十五

えやいぶき 円下　えり 蘭ノコトヲリアラハノ 枕草子

えぞ知らぬ えぞ知らぬ

縁所 墓所ヨリ

蝦夷 蝦夷 換夷 中古からふとの侍ど 蘿蔔人 東北ヒ住ム

鎮国論

エのフロン アブラヤサン

えさらぬ 得不離 サリエヌ

サラズ 避ケタカヤ

お萬が紅　あまがへに　外肩附ツミ　おやぢ　墨ニヒヤヂ

お深　藝妓又ハ町ノ娘ノ繋ハ　陸本所相撲又ハ浦ノ地名　お轉　様子　相撲人陸奥

お里　鮪ノ異名　義經千本桜　鮪平惟盛ガ大和下ノ勢籠

鮪子　ヒラ　ヒラ下ル　孫助ヨリ子陸ヒ　ヒラ家ノ娘　お里ハ鮪ヒ

おかつさま　一家ノ主婦　ヒラ　狂言ノ新女　又孫助

おどざ　女ノ溺死　走馬　おかつさまヨ　おかつさまヨ

おけま　ハネカヘリオテバ

かあ　あなに　お上ハ法師　七駄ハ　不倫

童廛　七駄ハ　不倫

おに　鬼　お里　鮪ノ異名　ヒラ（孫助）ヲ見

おにたひ　鬼鯛　クヒムコケニハチノ注ヒ　お七　放火犯　相撲人陸奥

女之助　外肩ヒラ　折助　外肩ヒラ

四太夫　ハヒ　大藏屋敷　外肩附ノ

簡易料理

村井政善氏談

▼「伊勢海老鬼殼焼」は伊勢海老を五尾水で丁寧に洗ひ、鍋に清水を入れ少量の塩を加へて火にかけます、沸騰したら前の海老を入れ能く煮こまして火から下し笊に上げて一度清水でザツと洗ひ氷気を切つて冷ます、次に鍋の中に味淋一勺醤油を入れて一沸騰の上火から下して置きます、炭火に金網を乗せまして熱くなつたら、以前の海老を角の方から縦に庖丁を入れ、二つに截りわつて肉の方に前に拵へて置いた煮汁を塗つて焼きます、片面が焼けたら殼の方にも煮汁を塗りまして両面共程よく焼き上げ除り大きければ適宜に庖丁を入れて皿に盛り、粉山椒少々を撒布して供します。

大正十二年一月廿九日午

報知新聞

おしゃま 外骨ノ造ナル

おたやれの東歸 「御出有」 宮引女

「宮崎屋四ハチノ招婦」

おしゃらく 外骨ノ造ナル

オケライ 廻来 (出来) 承知ヨロシ 明治初年コロビ塾者

奥様 桂宮様ノ一種 赤侍ノ隠語

鬼 東京ニテ私娼白鬼 (北ノ者) 戦後出来 中山博道 郡五郎 私娼

和志 奴 外骨好言葉

尾なし狐 (ロエ)

四畳半 昔ノハ妾ヲ鬼ト云ヒ代ヲ代ヲ又ハ

蒼蝿 昔ノ妾ヲ鬼ト云ヒ代ヲ代ヲ又ハ

御曹司 「貴公子」 「貴公子」 「貴公子」

御方任居 曹司ノ御方 御方御所

湯
各處店にあり
いかなる病にそうな重症の注射をしても治らぬ人ノバリさなほり二度さる方が御山あります。心して他に比類なく而して一品の妙藥門のおになります嗽息に苦しの方は價六十錢一間五十二錢高外四十五錢
下高坂町廿番地

繪新炬 外貨ノ部

お七掛ハ

お駒淨 お駒ハ お花獨ハ

小安人形 アヤツリ 女姿ノ人形

お右ひき 右ひき俗ノ集ヨ

御の宮 上等ナリト思フモノ 吉原大雜主（近藤） 「御の宮 蓄電係」

外貨物ノ部

おいらん 日本五 古クオンナ 裏ノ手ノ手法ヨ

おやま 京坂ニテ 大夫天神ノ外公私 美女ノ俗名 女房ヒフ あまつぶ

御職 職業 外貨物ノ部

お千代舟 外貨 妻春姫ヒ集ヨ

帝都風俗附錄

（若女人形ヲツカフニ坊ニヤリニヨリ美女ヲ小山人形ノ ヤヒヤリトモヒヨリ出セ美女（日本漫畫）

孫娘ノ改人形ヲ出セ小山法師三郎 ヒヤヒヤ

お月よそとり 外貨物ノ部

御ちゃ 外貨物ノ部

ちゃれの東儲子「御出有」 宮引女

皇都午睡「大津ニテ宮崎屋四八ノ招婦」

しゃらく 外貨物ノ部

ヒライ 遊事 人英語 Eight 承知ヨロシ 明治初ヨリ コヒ藝者

繪 桂苗傳ノ一種 赤俗人 堅俗ニ

東ニ年 私娼 白窓 紅燈 中山傳 郡五郎 私娼

和古 妓 外貨好百古

屋モ ゆし 狐 ハ上

男爵 昔ハ人ヲ見ハ化ケ化ケ人ヲ見ハ化ケ化ケ 狐ハ

著書 東山ニ千年住ル千年 私家 狐ハ

御曲日子 ヲ 黄公主 老年 間ハ 曹司ニ

ヘヤズミ 宣四時代

御方 俗 曹司 御方

特家世ヨリ 御方御所

多みなへし　女郎花　牡丹　芍薬　女郎花　本朝文粹　清水　花色如蓋　香味如露
大木　中秋　白花ん　男郎花　一栗
大口袴　裙ノ口甚タ大ク　浙江帽子　浙ノ物産　四ハ左ヒさん　神カヤ時ノ冠ノ色ニ似タリ
あれ　我　世　壁代　十ノ十二　きさくし　壁代　十ノ三十二
おちく　條　口ナハ　十ノ三三　きさいち　口十ノ三三
おやおもひ　孝　クニオモヒ　おきさん　神陵　知恩　コスカン
おッへす　英語 Oppose　清水　銀　太　冠者　大名
おかへさま　御方様　牡丹　伊文字　「おかさまノ事ニサツきハ時ノ五　マツシレイ」
長谷部二人　五十三注　二安ウ生レサツきル子ハ格ゲキ　手
（奥ゆ　奥　話　正　呪　中　西　医　伊ノ三　伊　各　伊　三　伊　人ノ）

あはい　また　大股　キザニアレ　思ひ込ッ　コロダリ
おそし　鈍　万古十二ノ廿七　万五ノ三　鬼殺　伊勢　酒　一十六下
思儆　コロナシ
思遣　脱ク　おもの　御膳　おもひのたま　念珠　河内
おもてのせ　卵ニ　二百三十下　オモテヤ　メンタフ　ありたつの　おもひやる　三百四十上
おに　隱　女　おはしたつ　四下　あまうち山　あまよと人ロ
おいせめ　かど　不老門　川崎　おもひなる　四下　おもひの　大　大宅
おしあけかた　四下　あまめく　二百三十二上　おもひつぱる
おもひぐまなる　四　あやのあやの　おもひくさ　ゴト
あまま　四下　おもひきや　おもやれ　おきなさび　二百三十三上

おきるくさ 翁草 事異名 老子物 おもぎらむ 雪類ノ ヒトミシリ おみ使主 四上

おもぬけ 四下 あきぬさ 二百三十四上 ふかしらう 四下

こいのよ
たい 下

しきなび

くず

二三八上

二四四上

二四四下 オホンベ

ぶどしい 下

おべざと (名)「親里」

九ノ世ノ一ノ九三

生家

又懐ニ似タル ぶりざる

あまざる 大猿 オホザル (猿ノ木ニ縁リ名形 隨テ アラコザル コザルトモ

あがしほ 大潮 松ノ上しほ

清津 浜始 みなみ はまめ ヨ夏

オッエトス オッエケル イツケル イツカル 如河 ハル ハル

大市所 東京 ノ 官ニ ノ 二七七 ぶ 廷二 ノ 二

お年始 おる 仙 ちとはじめ ヨ夏

おなに 大戻 ミヨニテ ノ 大戻 セイリ ヨ ノ 小庭 ニ 家

大家本 紀ノ 舘明 四七ノ

おとこ 押照 万二十七サハシ 起時 オキテ

あまく 寺 (名) 松

おとよぶ 枕草子 七ノ 碁盤 ヨリ 遠 ク テ おとよぶ

おきるとさ 箱草 事異名 老子草

おもぎらむ 面ノ類ノ ヒトミシリ

おもぬ 四下 あまぬさ 二百三十四上 おみ 使主 四上

おみなえし 四下 おかたち 犯 二百廿四上 大炊 廿五上 オホカヒ 二五 おみのたいしよ 廿五上 おみのたいしよ 廿五下

おとあべ 四 おみ 臣 四 おほ

おはしまそ 二四五下 おほみけ 二百三十七上 おもこたまへ おふなくに

おそりこ 下 おどろ 荊 イバラ あまをんなとみ おきくらん 二三八上

あまろか 四下 あまきみ おみふ 二三八下 あまにへ 二四〇上 二四〇下 オホンベ

おさるみ 下 あまるもち 二四一上 あまとし 四上 おきろみとしの 下

おびと 下 あまくちの あたたきき 四下 おとたるばた 二四二上

おとむもめ おもほぞ 四下 あみのそとめ おきなの

おほまさ 大猿 オホザト 猿ノ木ニ縁リ名形 コザル 隨テ アラコザル コザトヲ

又懸ニ似タルノ名

おほしほ 大潮 拉ノ上しほ

清澄寺始 みなみ悔め ヨ暮

オッエトス オッエケル イツカル 如河 ハル カハル

大市所 東京 ノ 官ニテノ一七七、災害二百、

お年始 おる 例 ことはじめ ヨ暮 玉 オホキミ 親王ト列ニ親一ノ上ノ サニ

おほにに 大戸 ミヤニテノ 大戸 セイリ ヤウテノ 小庭ニ 大家ニ 紀ノ 舒明ノ 四七ノ

おとこ 押照 万二十七サハシ 起時 オキテ

あまく 寺 名 松

おとよぶ 枕草子、七、しるし 碁盤ヨリ 遠クテ おとよぶ

陰陽道　史料編纂三ノ七ノ七ノ五ノ七
十ノ六

おふし　唖　夢ヲ

大神　入れ　さかたとノ條

おを　坪　駄　坪代　百人一首ノ條　掃部　賢

あほ　ま　つきみ　万　大臣　指　ニ　ヨッテ　ニ　征夷大将軍　巨勢麻呂　佐伯石湯

大山　三貫　サツマ　備前ニ記　條元人　大臣ニアラズ

大園　サツマ

おかた　昨日ハ今月の物語ノ
仕　稱　巨　持　チテオコシアル　牧　費　知　長老様　長老様ハ　其ニ　大夫　屋ノ　南
内儀ノコトヲ　持　チテ　御参リ候ト　ニ　ヲ

おちの　絵　おこう　唱　金　物　望　サル　オ　おこうさま

奥　書ノ　雅楽　ヤ　ヲ　バ　ヲ

大刀　自　神　さかみ　かのかみ　ヲ　見ヲ

ちほ　みわ　崇神紀　五ノ　大神之掌　直　称　二ノ　千三百　二十二

おさきまっくら　俳集　サキ　ニ　ヲ　百五十六

おどろかす　軽改集下　マトロ　バ　ヲ　おどろかす十ヨ　合　ヲ　ト　見　夢　ニ　ヲ　サイト　思ハム

おとろく　古義　四下　八十六
万　四ノ五十二

オルガン　前　Orgao

おに　ろし　物　衣　食　医　俳
四

大刀　自　万ノ　ヲ　ノ　十五ノ

おし　ま　子ズレ

風　太平記　三　菊池合戦　鎧　威ノ
れ　兵ノ　一七九四

おざ　ろう　ビッガフ　俳集　百　十六上
四サヤリ　松ノ　ざまり

おけし　ロ　友ヲ　竜　虎ノ　歌　四
カツパ

おはぐ　ひら　堂上ノ元旦ノ供膳ニ　桃色ノ　図キ　餅ニ　姿形ノ　白キ　餅ヲ　重ネ
タ　キ　牛　姿ノ　味噌ヲ　添ヲ

おを　ふさま　雅　俗ノ　さま　ノ　来　拾遺

おっ　乙　オト
乙　姫

ありべさかつき　本稱ノさ「光」（盃）

おひのみたがい　盃ヲ諸侯ニ宝ス、（庶ニルニテ利ヲ生ス）

ちんばう　清坊　大名　盃ヲ キタキ ニテ

おもひ　光　言別十八下　解語ニ衣服（オスエ）　おそでぶり　オソブニト　ニニ分ケルニ

おく、おき、奥　言別三三下

おく、盛ル　袋　夏傳奕　俗医ノ中ノ一ツ　文明ノ所業

ちんばう　清坊　火鉢　能ノ小ノ上ハ十ウ

おめざと　親里　ちとう見ル　ちとうたち

おちあめ　芋落雁　さひあめ　見ヨ

おきめい　小最愛

おと　音　イヲ　皇妃ノ　さう　猫　ねこ

おきめ　置目　掟　慶長十九年島津家久ガ其臣樺山久高ヲシテ琉球ヲ掟ヲ定ヒメシ書「年貢其外ノ公物ハ中日本ノ奉行如置目ニ可被致取納之事」（薩摩地ノ南島沿革史論　明治三十二年六月　信山房刊）

衣　乗馬三才二百十丁　衣服手須

おはた　往ク　うたぬの　（阿伽尼）　イツクヨリイツクヘトナクモノ　紫樓ヘ沈　六ノ二下

奉高　吉可左宇衛

おきろすし　沖縄ノ　ろすし　ろい紙　たし

おんえん　該文　ことうえんもん

オゴダ　ごだ　山漆草。是ヲ

おもひぐち　ちつ川ノ　笠裏ノ。

おもえにち　御三日　さんにち　ツヨー

おかまゝほうき　寓焉

おほくの矢　多クノ　あまたノ侍ニ供アリ

おうゝろ　百科ノアチジマ　三ノ一三
メクラジマ

カ

スヽテノ吸口
青柚子ニ
名残ル

下酒　書儀（司馬光）婚儀ノ上、親迎ノ、叙者乃令之下酒セ
遊仙窟ニ「桂心特下酒物」東海船俳西山隣
梅園日記五ノ十六

鴨頭　太平記第方蜻蛉起ニ京方ノ鴨頭ニナリシ云々
掃壊集、食物 鴨頭ノ後 狂言記 鄭屋ニ 柚ノかうとうニ貝杓子取リ
取リソヘ四條流庖丁書ニ参ニヤ物ノ上ニ置クかうとうヲ薬香頭トシテ云々
白鳥髪管鴈ナドノ皮入ノ時ハへぎ生姜ニかうとうニ可置云々 鳥ノ射餘ハ
柚ヲへぎニ可置上是物ノ白ヲ屑可然也 當世酒口ヘ入テ付ルニ鳥ノ毎ノ物 香頭
ニ入ルヽ事 如何ナル仕立ゾヤ 梅園日記五ノ廿二 秀吉六十巻至宴 鴨

懸物 和歌会 吾妻鏡 弘長三年二月 梅園日記五ノ廿六

卯子（カヒコ） 王子 忠見集ニ タマゴ 生テニ死ル卜見ルほどにかひナキノ身ヲ一ニニテシヤラレカル

行李 榜枕 梅園日記五ノ三二 皮太布 皮太 皮坊

かあそろ カアテ天下 蕪ヲ擣ヲ揺ル男性ニ在ア
蔵六ノ三

角兵衛　商ひ　相元　四ツ　亀屋ト伏　外番附ノ上

安平次平　鉄撰傳蔵

高慢吉　倒ヒ　寒四郎　天太郎

河津掛　河津掛　外番附ノ四　隠妻

川竹ノ流ノ身　外番附ノ上　桂女　嘉平　蔦屋　獨斷　脇三

加賀女　四ノ上サシ　格子　四上サシ　解定

かさひ　四ノ上　先立　四ノ四　乞匂

かさとめ　金止　四ノ四　鼠の島　四ノ五

かさしよね　隠妻ノ屋　四ノ上　隠妻女ニ今し

宣長　祝　四ノ六　千鳥　四ノ八

かのし　雅子　四ノ九　かひしゃう　ナヒクレキ　牡丹

ケはまり　衣笠内大臣　日暮ノ上　軒　元ヒカ　ケ月ノ羽　尺モ　深レカリ

ケはつき　床柱　掛帯　流り物　ケ九　髪　四上

かさ　傘　ニ三　鏡　ニ十三　延長上年　有　十三　今夜は　月在　五色笠

江南所無　田陽軍船　四ノ五品　格子　支那

かくれい　鮮草　長方形　中央ネダル

かつを　鰹　一千　虫ノ如ク黒シ

唐傘物　能年品　金刺　緋　平絹ノ一面ノ

唐傘　本邦ニ傘　地生傘ニテ　唐メヤ　傘物

信元同六　話住　白氏文集　婦人苦辛　妾身重　四六　名義　聯句

屋口 柔レイー 清り和漢四八

高家 清り物語七十一

甲夜更 清り和漢九

からかい 竹井 百二百九

かやとも 唐代十ノ三

考 オヤオヤヒ

かざせ 伊勢相可 かもし かゝ

カタツリ アコエ、クツメ

カラさと 校 横校手伝 官名 接すも

上方録 京録 林録 永楽録 ニ 和漢ノ 輕校 六ノ 奥ノ

高麗縁 清り 物語五十五

柏木 左兵衛督ノ異名 八重垣物

加持 清り 百二十

かさ子 数 唐代十ノ十三

かまいたち 黒焼 係ノ 閑田次第

合掌仁右馬 迷蔵ノ非人 下谷唐傘ノ おもと

乞匂 ヒヤ 脇

神の国 天四天 神国 三十 船 四ノ三

神に 接すも

輕校 六ノ 奥ノ

話の種

何首烏の成分 臓器の蒸焼薬

昔支那の能闘といふ人がエキトウといふ物を山から採つて来て服用し、六十歳で数人の男を産んだ、これが皆長命で、その中延齢といふものは百六十歳まで生き、延齢の子首烏も同じ藥を飲んで百三十になつても、漆黒の美髪を持つて居たので、この藥の名を何首烏と名づけた▲ところが今日試験の成績によれば何首烏にはそれ程たいした成分はない、様である、人間の身體に強く作用する柳糖類基も含んで居らず、糖分や澱粉はそんなにきくとも思はれない▲オキツメチール、アントラヒノン類が二パーセントばかりあるが、勿論それがきく筈もない、燐酸や鉄の化合物がきくのか、それとも神秘的物質が、殺菌性を有するやうに、腸中のバクテリヤを吸收するのではあるまいかと解せられて居る、兎に角草根木皮を煮出した中には、まだ〳〵人力で作る事の出来ぬ複雑な成分があるらしい（日本化学工業新聞）

大ぶ十四ノ七 一部を紹介

家傳 十年の慢性疾の雄 最も顕著なる
特効 霊薬 無代進呈 広告切抜きと二銭切手六枚添 込みの方に一回限り三日分進 横浜三吉町 伊藤製薬所

衛生口鍵

昼日中 ヒルノ 高麗縁 海ルノ 手綱五十五

柏木 左兵衛督 異名 八重垣姫

加持 浄ルリ 百三十

かぎ爪 数 廣代 十三

かまいたち 黒焼ノ 保 閑四次第

合掌 仁右馬 迷惑 非人 下谷 廣徳寺

乞匂 胸

神の國 天皇大神 御國 三千 編四三

官名 授ス 神田

輕技 ムスコ 興ア

隅田川 魏志注 少好 博通 書記

交 新脱 牧 柱 注 本 稿 輝

隠ん 孔 宇 佐 俊 薩 下 父 五 三 年 母 五 五 年 三 月 俊薩 藪

かくり 伏 まり 見

かう 鴉 聲 コカコカ

かぶれ れ ほ ッ か ル 飯

カスパルリうの流 阿山 南 流 ノ 科

廣安 一年 阿 北 陀 甲 文 冊 行 幸 朝 七 人 島 ア ッ ノ 日 本 人 ニ 伝 ヘ

日 本 書 ヨ リ 早 ク 上 ル 西 ス 郵 使 ニ 伝 フ 史 書 雑 ヲ 三 千 三 ノ ニ

かと 川 カ ド 人 生 物 ヲ カ ス 前 ッ 川 ト ミ

カルタ 答 児 Catarch

更 廣 武 家 川 長 川 一 夜 何 故 五 更 ニ 更 歩 ス

廣 廣 昼 廣 業 家 法 ノ 九

世 ノ 四 八 中 五 更

かけ 鷄 コケくコケッコウ 交趾燒 胞

鴨居 幸家灌汚抄ノ五 蜾牛鏡加仏留倭名抄加仏流堤乃木 蝦（嘷声）

革 葦 碇 帯 ヒヤクイ ヒヤクシイ

かみこ 故 下九ノ三十三（十二五其合いや 別ニ一字アリ） 駕輿丁 コミカキ

冠 かざす 和英 册ノ一二五一 雅其

かける 記上 此地者朝日之直刺國、夕日之日照國也故此地甚吉地詔而

記雄略 マキムクノヒシロノ宮ハ朝日ノ日照ル宮夕日ノ日翔ル宮

乾田乃神等祝詞 五百日青 朝日乃日向 夕日之日隠處（青き）

かれいひ 雅言考二五一下 二五六下ノカレヒ かたのと 二五二上 かね かぬる 二二三上 十七七カネ二五〇下

かんさね 二五六上 かしまる 同 かつら 二五三上 かはらい

かく 斯 二五三下 かぎ 同 おかがる 同 かづくい ヨカハ ヌカヅク

かうたち
かうぢ

◇鴨のはし獸◇

濠洲の小川に棲む鴨嘴獸（歐名プレイチプス）は獸と鳥との中間の生物とも稱す可き動物で、性質は甚だ臆病、間もなく絶滅するだらうといはれてゐます。

五ノ三ノ廿一 朝日新聞

…あび 同下 かむか・かの かりくらひ

…ひあがる 先下五行り かせまもり 下 がね

…まうた 二五六上（二七九上） かばしや かしはで 同下

…沙床 二五七上 二六五下 かんはぎ 下 かどりや

…二上 かみうへ 同下 かるへて 同 かむはたい

…イチヅキ かめのけ（二六六下かぬまね） かままみ 下 からくに 二六〇上

…草 二六一上（かきがひ 二七四上） 同 かたまひ かあまう 下

かかひ 下 二六七上カヒカガス かふかき 二六二上 かがよふ 二六六上 かるとび 二七一上 二六六カト かはね

かかみつくり 二六三上 かざをき かすみ 下 かつむし かひたち

かなをき 二六四上 かむ醸 かめのうら かむはらひ

かけ 鶏 コケくコケッコウ 交趾焼 腕
鴨居 華家蓮浮枝ノ五 蛛螺 鍾 加仏留 傳名抄 加仏流堤乃木
華葉 砕帯 ヒナタイヒヤクタイ 蝦（嘯声）
かみこ 故 下九ノ三十三（十二巻 其合ひや かに一示り）
冠 かむり 礼苑 腰ノ一二五一 雅兵 駕輿丁 コミカキ
かける 訓上 此者朝日者直刺國 夕日之日照國也 故此地甚吉地 記而
乾田 訓 雅宴 マキムクノヒシロノミヤ 朝日ノ日照ル宮 名 以賀流 字
(?) 枚 五百 者 朝日乃日向 タ日之日隠（宮）
かれひ 雅言考二五一下 〃二五六下ノカレヒ かためと 二五二上 かね かぬる 二二二上 十七七カ木 二五〇下
かみきね 二五一上 かくしまろ 〃 かつら 二五三上 かはらや
かく 斯 二五三下 かぎ 〃 おかがみ 〃 かづくは ヨカム ヌカヅク

かうたち。
かうだち

腰入

かましき 二五四上 かみあひ 同下 かむか 〃 かりくらび
かむさる 二五五上 （二五四下カムサリ） かむあがる 〃 二五九下 カムアガリ かぜまもり 〃下 かね 〃
からあ 枯野 〃 かみよふいた 二五六上 （二七九上） かはしび かしはで 同下
かにかくに かにかくすも かむとこ 神床 二五七上 二六五下 かんはぎく 〃下 かはじり 〃
かづく 二七六上 かしは 二五八上 二七二上 カツサイチサッキ かみうへ 同下 かむはたい
かづく 二五九上 かゝり 二五七上 がしは 二七二上 かまくへて 同 かむはた
かつく 二五九上 かまのけ 〃（二六六下 かぎまみ） かまきみ 〃下 からくに 二六〇上
かむぬし 〃下 かや草 二六一上 （かきがひ 二七四上） 〃 かたまひ 〃 かあまろ 〃下
かかひ 〃下 二六七上カニヒカスズ からかき 二六二上 かがよふ 二六六上 かると 〃 二二六カナト かはね 〃
かかみつくり 二六三上 かざそき 〃 かむづ 〃下 かつむし 〃 かひだち 〃
かなさき 二六四上 かむ醸 〃 かめのうら 〃 かむはふり 〃

かみさと　薬　三六四下　から薬　三六五上　かるばたゞ下

かゝのざと　かてゞ　ゞ　三六六上

科學と發明

ガスの毒

——油斷はならない——

炊事や暖火に使用されてゐるガスはもし燃えないまゝ洩れ出てゐる時は、それを吸ふ人を死亡させないまでも、衛生上有害な影響を與へる。それはガスの中に一酸化炭素は血液のヘモグロビンと結合するからである。

（ヘモグロビンとは吾々の赤い血液の主要な成分と成つてゐる物質で、これは肺において酸素と結合し、その酸素を身體の各部に運ぶことを職務としてゐる。しかしこのものは酸素と結合するよりも一酸化炭素と結合する方が二百四十倍も容易であるから、もし空氣中に一酸化炭素がある時は肺において酸素よりも多くそれと結合はそれだけ減ずるのである。

尤も一酸化炭素の影響は分量次第で相違があるもので、普通の健康な身體にあつては（ヘモグロビンの二割と結んだ）だけでは能ね本人は氣づくことが少い。長時に亘つたる場合にたゞ往々頭痛を感ずるのみであつても或る期間にわたれば吐きけを催し頭痛や目まひを覚えて仕來るものゝ重大な結果は起して居らない。

しかしそれ以上割合が高まればヘモグロビンの五割が悉く一酸化炭素に侵略されると心身ともに衰弱し視覚や聴覚も変へ始める。その際ひて昏倒するやうになつてゐる。但しこの患者は生氣がなくても新鮮な空氣にあてると今度は酸素が一酸化炭素よりも多くそれと結合し回復し遂には健康狀態に歸つてゐる。それだから致命的といふことはできない。致命的なのはヘモグロビンの五割以上が一酸化炭素と結合した時で、さうすると何等の苦痛も感ずに全身麻痺して遂には死亡する。

しかしこの窒息は千分の十五以上の一酸化炭素を含んだ空氣が數時間呼吸して始めて起るものであるからその危險は比較的少いわけだが、それでも普通のガスの中には油断し難い分量の一酸化炭素が含有されてゐる。石炭から作つた綿粹のガスならば百分の六乃至八だけの一酸化炭素を含むに過ぎないが多くの會社は経済上の理由から百分の四十も一酸化炭素を含有する水ガスを混入させてゐるのである。

（二九的社会学、現心の社会学、（一活改造（第九号）

かゝへ　ゞ　五足　千枚ノ作・三人ガ　オーニ　興アリ

家族主義　個人主義

かゝしのかぜ　脚

かゞ　奏ス　好　コテアテノ　著作

廣島　立　五花　神四　五八九

廣島事解　四上

かゝみ　蟬　蜂

海賊奉行　海軍　破棄　作法奉行

（カヘリ　ヤマ）　四忠　大平　ヒ　一　頼貞　田忠

かゝうつ　コマビヤツ

かゝ　俗　法　九十三下

かゝ　おにおどし

かゝ　ゞ　ひも　音附　ボノ　鳥　五三

十キ　ハ　セ

かゝりと　変ハル　ふゝりと　晴ヤ

をいはなくとも天地に恥づる処はないではないか（帝国臣民）▲海軍における倫事の綱紀と綱紀を正工事とに何等かの交渉がないとは保証されまい彼等不正工事を働いた徒輩は単に監督官を欺いたに止まらず国防の為め大の負担をなす我国民を欺いた賣国奴である厳重なる制裁を加へなければならぬ（一中学生）▲時勢の進歩にしたがつてだん〳〵便利簡易になるべきとや通信機関がこの頃の投函改正らで通々不便になるのは実に慨歎の至りである日曜祭日等における係員の不親切は言語に絶するものがある（子眉生）▲中学の教科書に勝安芳とあるのは間違ひでないと記したのに対しまた抗議を申込まれた人がありますがやはり『やすよしでいゝ』のです前名麟太郎いゝみなは義邦任官して安房守となり後安芳と改めたのです（係）

武林文子氏寄作品　四月五日一日ヨリ十日デマ
パリ好子供帽子展覧會
四月一日ヨリ八日デマ
セルル・ネルモスリン友禅陳列
内ノ丸電話二三六〇 二三六二 二三六三
丸の内ビルヂング六階　大丸呉服店

江戸から東京へ

（六七〇）

猪也

役者のつぎに脱まれた陸間

◇水野越前は成大名の宴席に招かれし時絵模様に立やの字をかついだ美少女が物縫れたさまで座間を餐応して居た、高の定紋のついた銀の両天を挿た妻も上品であつた、孔子孟子で鍛へ上げし水野越前はかつてこの種の人間を見たことも聞いたことも無かつた、そこで傾の客に小さな声で『彼は何者でござるか』と尋ねた、傾の客は水野にそんな事を聞かれたので返答に困つて了ひ『アレはイエ何』とごまかした、しかしアレはイエ何ではなんのことだかわからないから水野は『何者でござるか、アレは』とからだを少しねぢ向けた、隣客は『これはドウも恐れ入りましたナ、彼等は至つて臆しき者で候公などのお耳に入るゝやうな業態の者ではござりませぬ』と自分がわるい事でもしたやうに声を落した

◇水野は屋敷に帰つてから其美少女の身元調べにとりかゝつた、美少女と見しは其の実男の子でカゲマと稱する業態の者であることがわかつた、カゲマなといふ職業は論語にも孟子にも出て居ないから水野は懐慨に堪へなかつた、水野が天保十三年三月幽場所取つぶしの厳令と同時にカゲマを禁止したのは過ぐる年の宴席で誰が家の瀬女かと一杯食はされた腹癒せも手伝つたことであらう、それ以来この取づべき別紙業態は日本に跡を絶つたが、職業とせず一種の遊楽として九州地方に同じ行為が傳はつて居る形跡がある、天保改革当時のカゲマ茶屋と稱するものは浅草、芳町、芝、八丁堀の四ケ所であつた、このうち名にし負ふ上野三十六坊の名所旧蹟を援者とする湯島は商品も優良、生活の度も高かつた、湯島で年増になつたのが芳町に移り芳町でも盛目になつたのが八丁堀などへ流落する、八丁堀には男の外に男に対する男、女に対する男の用意もあり客が杯を伏せればカゲマを要求する意味であり其個にして居ればこそ女で沢山といふ意味であつた

◇湯島の茶屋界の事はかつてポチリ記述したが、水野が憤慨したほど驚くべき全盛であつた、天神頃は驚くべき全盛であつた、天神巷者の門脇たる酒軒茶は当時カゲマ茶屋の総頭であつた、カゲマ茶屋と絵稱は三谷屋、津賀屋千代本の四軒だけで藤村家、加賀屋、津の国屋の三軒は部屋と呼ばれた、千代と稱する美少年は部屋の方に抱へてあり見番の手を経て茶屋に招かれる仕組であつた、しかし其個別も天保の厳改ころには茶屋の方に撤回されて天保の厳改ころには茶屋の方に抱へて居た、子供の屋でも子供を一軒の家に三四人から七八人、四人七八軒を併せて常に三四十人の稚児が準備してあつた、また茶屋と部屋の区別があつた頃は子供の供へ口かゝると溢り男衆が家定紋のついた大風呂敷に夜具を包んだものを背負つて茶屋まで子供の供をした、職分と気の利かない職務である、今どきの藝者は決してそんなものを撫でまはしたり茶屋気質帯の間へ忍ばせ込んで行くのが関の山である、藝者の風儀がよくなつたともいへる、わるくなつたともいへる

◇子供は揚屋大阪から仕入れて来た、食物も芝居も女学も音曲も女郎も上方から来たやうにカゲマも上方から来た、江戸のカゲマもまた上方の子供は上方の藝と共はコツ〳〵骨張つて物をいはせれば巻舌で喧嘩腰だから到底特殊の商品たるに適しなかつた、これに反し上方の子供は上方の藝と共に委かやさしくて巻舌がならかであつた、江戸の少年が『何いつてやがんでイ』と肩をそびやかす時上方の少年は『あほらしい、何いつてんや』と京しい眼で相手の顔を見癖ゑる、大阪には丹波屋といふ子供専門の口入宿があつて其處から子供を荷造りして江戸へ送た、黄盛りといつても生物だから酸へ油煙を塗り前掛の小僧仕立にして雲助の鑑を避けつゝ東海道を急がせた（この話つゞく）

時事川柳

池の端娘を貰つて出来た品　腕摩で蜘で首の方がとく
夢の町　とする性愛の欠陥　紅燈　新星
つながつた百機ゴム　剣火童　剣火童
卒業をバー女給は淋しい顔　花笑軒　花笑軒
尾服今日は還良し　法廷中笑ひ　同　太
懐ろ手ペンチ　同事　同
丸ビルで花月のお回数　三日
女房に見せて淋しい百の金　同
上野銀座新橋　小指の爪を伯父　同
鶴蟹が小指の爪を　同
手当金つなぐ　同
土族などと水平社　呑平鳥
女房の智恵内閣　同
陳十郎座には物足ず　松
師笠へ御苦労　同
カナリヤも暗室には　同
爆発も不正事件も例の事　同
お互に恵首も　同
社方ぶつぶつ　三四
敵がふえる　同

家庭と文明
カスの毒
―酒類はだめならう―

かみさと　歩キ　二六四下　から蘇　二六五上　かるばたゞ下

かゝのざとゞ　がてゞ

からのかみ　韓神　二六六上

かぢづか　かぢから

かつをゞ　かつを人

かむつまり　二六六下

かく　掻　二六七上

かはづ　二七一上　かい下

かさゞきのはし

風葉　二七四下　上

コレラの親類 騒なカクラン

防豫 飲食物に注意する事 手当を怠ると危ない

醫學博士　坂上弘藏氏談

幾ばくか子供か老人でなくば助かる、この場合コレラと区別するのにはその

▽菌の有無を　検るより外ない、素人の手当としてはブドウ酒かブランデイ、或は日本酒などを適度に與へて心臓を強くし、胸部、心臓部、足のふくらはぎにカラシ（固めに水でといたもの）を紙にのばして貼る、これは十分お灸位に二回もとりかへればよろしい、さうして絶対安静にして寒冒をまつがよい、冀他から感染する憂ひがあるから注意が肝

▽皮膚が冷たく

かたぶはせ　敷服カ　爪先ノアラハレ、

さしはせ

加搆　中假名ヤヤヤヤツ

家族制度　個人ーニ至ル　個人ーー

ー主義　個人ーー

合唱　カフヤウ　業階

から　唐土他賊　唐琴　入レル　倭　唐　唐琴

かけづめ　懸爪　筆ーー　硯ヲ

かゞー　俗語　ヲ九十三下

おだおだし

かひゞひを　音附　ネツケ　北ノ小島　十キ八セ

かりと　ーー変ハル　ふるりト

かゝりと　廊丝　かゝりと　賄セ

かゝへたゞ　足ヲ　ヲ　オレニ　與アリ

家族主義　個人主義

かへしのかぜ　脱

かゞゞ　奏ス　ヲ　コヒアフク　著洋

唐島　立　五九　神ヨリ　五八九

かゞ　唐島東解　四上

かきみ　蜻蛉　カゲロウ

海賊奉行　海軍　破　仲　奉行

カヤリキツ

四忠　太平ヲ　一、　頼良四忠

コロビツツ

かゝうつ

かみさと　歯車　三六四下　から蘇　三六五上　かるばたゞ下

かゝのざとゞ　かてゞ　三六六上

からのかみ　三六七上

かぢづか

かつを

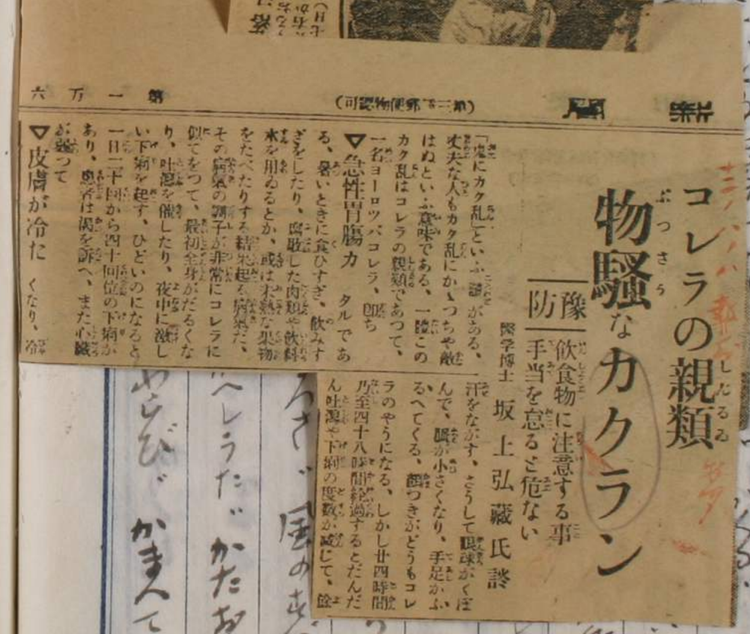
かむつま

かく　格

かはづ

かさゝきのはし

屋葺　三六四下　上ゲ



第一万六　（第三種郵便物認可）

コレラの親類　物騒なカクラン

豫防　飲食物に注意する事　手当を怠ると危ない

醫學博士　坂上弘藏氏談

「虎にカク乱」といふ諺がある、丈夫な人もカク乱にかゝつちゃ敵はぬといふ意味である、一體このカク乱はコレラの親類であつて、一名ヨーロツパコレラ、即ち急性胃腸カタルである、暑いときに食ひすぎ、飲みすぎとしたり、腐敗した肉類や飲料水を用ゐるとか、或は不潔な果物をたべたりする結果起る病気だ、その病原の胞子が非常にコレラに似てをつて、最初全身がだるくなり、叶吐を催したり、夜中に激しい下痢を起す、ひどいのになると一日二十回から四十回位の下痢があり、眼窩は凹み、顔は蒼白になつて、皮膚が冷たくなり、冷汗をなかす、そうして眼球がくぼんで、瞳が小さくなり、手足がふるへてくる、酔つぱらいがどうもコレラのやうになる、しかし廿四時間乃至四十八時間経過するとだんだん吐瀉や下痢の度数が減じて、餘

かへしのかぜ　脱

かるび　奏ス　好コトアテテ　著深

鹿島　立　五六九　神四

かから　唐土他販売　唐琴今ん　倭前庫琴

かけづめ　懸爪　筆ノ一　脱ス

かがし　俗語　ケ十三下　おだおどし

かびこびせ　音附　北ノ小島　五五　十キハセ

かりと　一変ル　さわりト　廉ス　かりと　賄ス

かかへだび　五三十　五八ノ件　三人十代　オレニ　典ヤリ

家族主義　個人主義

家族制度　個人ノ三五

一一五五

合ス　カ上ヤウ　業隣

鹿島　立　五六九　神四

唐琴今ん　倭前庫琴

かけづめ　懸爪　筆ノ一　脱ス

かがし　俗語　ケ十三下　おだおどし

かびこびせ　音附　北ノ小島　五五　十キハセ

かりと　一変ル　さわりト　廉ス　かりと　賄ス

かりうつ　コロビウツ

かばはせ　殺脱　爪怪アラバハ　さしはせ

加搾　中假名ヤヤヤヤツ

家族制度　個人ノ三五

一一五五

合ス　カ上ヤウ　業隣

から　唐土他販売　唐琴今ん　倭前庫琴

かけづめ　懸爪　筆ノ一　脱ス

かがし　俗語　ケ十三下　おだおどし

かびこびせ　音附　北ノ小島　五五　十キハセ

かりと　一変ル　さわりト　廉ス　かりと　賄ス

かかへだび　五三十　五八ノ件　三人十代　オレニ　典ヤリ

家族主義　個人主義

かみさと　里名　二六四下　から韓　二六五上　かるばた　二下

かゝのざと　かて　がてぬ　二六六上　かみのみやひと　かゝる

からのかみ　韓神　二六七下　かむあぎ　かむあぎい　二六七上　かゝ入りさと　二下

かぢづか　かゝら柱　二六八上　かたく　（二六八上　かなぎ）　かたし　鎹師　二下

かつを　かつを人　二六九上　かにばさら　かせぎられ　かせ　かれ　二下

かむづまり　二六九下　かへしもの　二七〇上　かりのやど　二七〇上

かく　掻　二七〇下　がに　かたしは　二七一上　からかぬち

かはづ　二七一上　かけまくも　二下　かりめたまぐさ　屋のまがた　二七二上

かさゝきのはし　かさみのはら　二七二下　かへしうた　かたおろし　二七四上

屋業　二七四下　上ツ瀬　かしづき　かきやらび　かま入て　二七五上

かぶはせ　鬚服

加持　中假名カ

家族制度

一一　主

合二字　カナヤラ

から　唐土他服

唐琴　合

かけづめ　懸爪　筆

かゞし　俗語　九十三下

おだおどし

かびこびせ　ネツケ　音附　北ノ小島　十キロバセ

かゝりと　一変ル　さゝりト

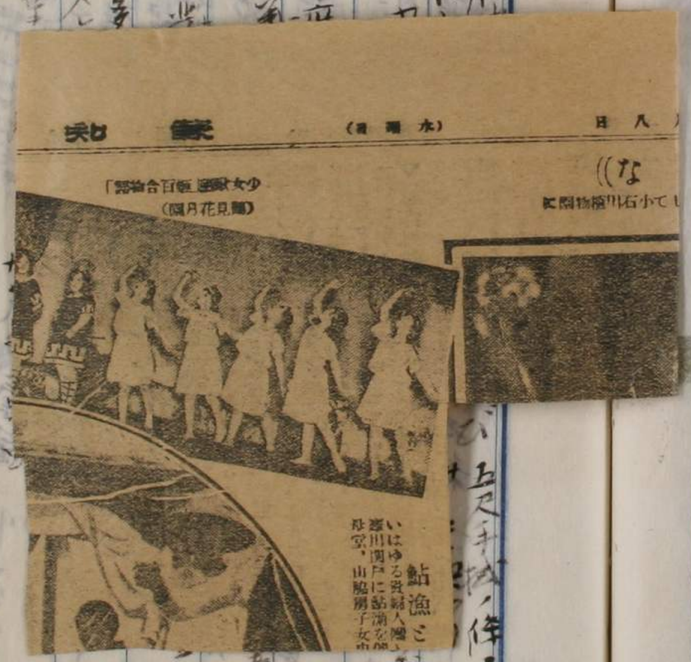
廉丝　かゝと　賄セ

海賊奉行　海軍　破棄　俗語　奉行

カヘリチキリ

回忠　太平セ　一　賴食西志

かゝうつ　コロビツツ



鮎漁と

いはゆる鵜人魔と

隅川関戸に鮎漁を観

る堂・山船別子女中

[illegible]

烏 無明ノ使 神武紀 無道荒淫頭八咫烏 梵カラ 英クロー

勘當 天ノ神ノ五七道祖神

懸命 関ノ三三下 禁中ヲ[illegible]

鹿 鳴声 ケーケー

風 [illegible]風 川 カハカハヒゴキ

かけ鶏 外来 こたかけ 百濟かけ(北辺随手) かりく がりく

廣 ニコヤトヒギス

仙覺抄 かけトハ嘆ノ声ニ国ヲ立ハ[illegible]

ケイキ打 梵 クッケイタ 英コック

金 カネ カンク キンゲク 金銀

かるし 可憐 あるの形

見塚 考古学雑誌十三ノ九ノ六〇一

高野聖 延喜五年 俗世間 用印ト之三教指帰ナトヲ最古ト思ルトヒツ

かたり がたり ヒネクレ ノタクル

戒壇 考古学雑誌十三ノ十二七三七

鏡餅 銀ノ形ノ餅ニテ作リ 神供トスルニ始ル

鶴 日本稿ノ女房ノ俤

かけらよせ 菊 生絹 サヤ袋 黄菊ニ似タリ

かつを 昨日ハ今日ノ物語ヘ 山寺ノ僧ヲ、此程久シク若衆ニカツヘ メイワク イタズラニ詰ル云ヒ

かさねどき 重箱 浄瑠璃ノ八七五

かんはうり 神祭 万葉皇子 人麻呂歌

かものみき 賀茂齋 齋院ハ俗ノ暮 蜀 ゼニカツ 蜀後主

かもがのいとばへ 百鈴さノ七ノ六中百 練糸 栗接さ 九上

かしはで 天祭 神ノ二ノ九七ノ末

強飯 ガウハン キヤウハン 飯 勉ニ

弱飯 藁吉 外国使ノ行ノ矢弦

かく 脚 天祭ノ兵ノ一ノ五四五 かく又十七

下若侍 合天 服食 天祭 節 六八三

かけ〻ざや 懸鞘 提鞘ヲ見コト

ガス 瓦斯 コールガスの略ギーシガス ニューウェンブロック

かたのだるく 如法

高麗 レイ 呂ライ 礼ライ コレア

鐵面 カナメン 入れ歯

必ズ ゼヒトモ ヒット

竹籠 カゴミヽ 俵ノさノ二三ハ上 ザルミヽ

カエザル 羅馬法 Caesar 古羅馬三十騎

酢漿 俗文 澤瀉 百四十九ページ

カスミリヤ草 Cardilla 薫ノ旧五月名

神無月 九月 器ノ二ノ六ハ

垣 ヒキリ 言別十四上

海宮 カイキウ 多ツミノミヤ 龍宮

潟 言別三ハ下

かの子 蒲ノ子 算賀

鶴ヤ 会朝鮮ガラ

かけかね 又ヤまきガね

鯛司 吾妻三、法華五ノ七ノ、武蔵風土 草大工ヲ 鯛司

かけり 狂言記三 さろまのかみ、張僧、茶屋ニ休ミテ茶ヲ出サ 茶ヲ飲ンレ 諸坊茶ヲ飲レ サツミヤレ 僧ニン其茶ニかけりガ有マスカ

かさま 通俗仏法物語 沙石集

かまふ 構 吾妻吟 我集(慶安) 人ニ吸エツク 浮ノさまる

かうけ 高家 横川 源義ノ七ノ オ六ウ

かんさね 神宴ニ神 さね 俳ヨー 実

かたのだるく 宮治拾遺九ノ一 俵 杉本三十ノ四

かん 「合戦」 平他字数抄 地儀 平覧合戦モコレ

からし 考ル 裏ル 裏ル ヤ三ハ十ノ

かゝは 葉 今ヤ山民 あかめかしは 葉ヲ 芋来盛サ葉ト云ヘ 食物ヲ盛ル

かふかう 甲香 栄枯アキ十五 百科アカメカシハ二十九ト

カイモリバ

カンツク ガンツク カジキ ガンビキ ゼキ

感ナイ

きげん　酒に酔と快楽どアルカ

御色機嫌　一杯ー酒ー御ー

ーガヨイーーカアルイ

よく金をスッカリ　からに見た出

金ナシ　金ナシ　ナンチテ　金ノ多クツカフ

アハウバカ

金ナシ　金ナシ　ナンチテ　金ノ多クツカフ

アハウバカ

中着　外着ハ一金ナシ

覚悟オキンチャ　正気ノ手ヲ

君　お女　外着ハ　金ナシ　外ヲ外ハ

外見せ　ハ三十

人玉猫　金ー　ハ三

恐怖　貴様　恐怖　九棘　三棘ノ怪ヲ何ヤ見ヲ

きゃうげんきぎよ　狂言綺語　浮ハリ物語　ヨヤ　光ヲ　ヨヤ　ヨヤ

九十二ノ解アリ　詞ニ花ヨリ嘘カヤ

右ハテ見ヨ　腹ガ北ハ　喜ハ

上ヲ　金ナシ　金ナシ　ナンチテ　金ノ多クツカフ

アハウバカ

北山　京都ニテ北山ト云ヒテ見ル　腹ガ北山　嘉左衛門

牛太郎　牛好夫　金ヒ　汁ト云　金ヒ　金ヒ　金ヒ　金ヒ　金ヒ　金ヒ　金ヒ　金ヒ

金ヒ　外骨ヒ　清し　きよく　金ヒ　スッカリ　からに　見た出

一ヒ　いと　きえた　中着　外骨　一　金ヒ　ナキンチャ　五ヒ　ヒ

金ヒ　金ヒ　金ヒ　金ヒ　金ヒ　外骨　金ヒ　金ヒ　外骨

君　妻　外骨　外骨

切見世　切見世

人ヒ猫　鉢　人ヒ

恐怯　貴様　恐怯　九棘　三梗

きゃうけんきょ　狂言　浄瑠璃　九十二

雪谷 麿袋十ノ六

碁聖 畫聖ヲ

キヤスチレグ ハート

〔公章〕 元知 姓ノ四三三

一栄 天武代下ノ十

金時 沙羅 煎

吉士 鈍明廿三、有 諸吉士伊企儺

御麿代 十ノ廿五オ

ぎょうくし 輕 赤有くし

数言筆 藤麿 主 鎌公

きびも 祝ノくつノくつのきびも

切手 切手形ノ下書

光妙持 源九葵五 みかどときイト殊ニ思ヒキコエタマヘル

卿 東軒 改定史籍集覽ノ百六十三頁十一行 ヒガキ

肝膳 雄賀 九せれ心府 きまゞ〳〵 ココロドムシ

期待 ミロマシケ

イシチノ
ミチマチン

衣垣 あがき入れ 雅言考 あやがき、やべがき見ず

木ね 雅言考三七九上 きもわかし きそひ

きさえだ 下 きりそひ きねたち きさしをさて 二八〇上

きらくし きりは

きそなふ 二八一上 きたちし きらひ きき 二八一下

きりたち きさす 二八二上 きぬく きかまく 下

きもむかふ きせわた きさぐ 二八三上 きさぬ

きりたちびと 下 相撲 桂島 風屋 きさ ぶみ 黄泉

きねたち 雅考 二八一 コトトヒレイ ネー

きぐつのたち 松ノさしもやき

異説 考古學雜誌 十三ノ十ノ七四一

金銀兩建反對

鈴木穆氏談

大連取引所の建値を金銀併用すべしとの議論は最近新聞紙上に散見して居るが關東廳には恐らく左樣の方針はあるまいと思ふ元より議論をなす事は勝手であるのみならず金銀兩建論者も相當の論據を有つて居るか知らんが吾々は現在の金割制度を金銀兩建に變更するの理由を認めない即ち銀建が金建に改まつて以來同取引所に於ける大豆及豆粕の取引は何等減少せざるのみか之に依りて相場の變動を少くし實物取引の增加を來して居る様に金建の實施に依り對外的の取引は非常に便利になつて居る銀建論者は奥地と取引上金建は差支があるやうに言ふけれども吟嚴實地方法は朝鮮銀行券が通用して居るのだから金建で奥地との取引も支障ない筈だ金銀兩建論者は如何なる論據を有つて居るか知らぬが銀上の事實は如何する事も出來ないと思ふ

青佐間の海電交渉

有利に進行中

務當局に歎願する事にして午後六時散會した

ぎょーげん名魚拾

川柳「おきんき」鯉クラハセル 弘福寺」尚島 マヒ[illegible]家

忌中警 考古學雜誌 十二ノ十ノ六九八

共産主義 社會主義

狂言作者 五反田 東ノ三ノ一四三

きづちのたち　コシマヤキ、コシヨキタヒ

碁聖　松介　侶筆ノ碁聖（ゴセイ）　金圍（キンヰ）聴　共十五之　六之三九ん

𢪸（つか）　好古小録ニ拳ハ同身寸ハ中指ノ中節ヲ以テ一寸トス本邦食指ノ節ヲ以テ尺トス古今法アリ

乞人　乞児　林乙　梁孫外七九六　水右辺

言変ハルモ肝一ツ　沖僊ノ護謡諺大辞典

護訴ラ　イサカヒ　コトハアラソヒ　器用　職原抄下ノ本廿八ウ五八

きぬ　勝勝　万十六ノ三十　切兜　洋釈五人はおし無ニ○

きのまろどのに　梁さのまろ介　木槌（キヅチ）　さいづちノ條ヲ見ヨ

キクチス　牛蒡　本草類編　支太支乃須三百科

祇園会　八坂神社ニ祭ヲ見ヨ　正ヒトナハ祇園御霊会ヲ又祇園会　八幡人也

紀唖百針　起請（キシヤウ）　賤ク、禁中　牛王ニ伊豆ハコネ云ミ　花苑　牛王宝印　参見セヨ

兜跋鏡（タイワンハウス）　圓形青髪ヒ

蹲坐（ウヅクマル）　〔八安坐ニ對スル〕　中ニ云フ坐スルナリ　両膝ヲ席ニツケ両蹠ヲ後ニテ交シテ尻ヲ載ス

箕踞　〔箕其ノ如ニ〕　尻ヲ地ニツケテ両脚ヲ前ニ伸ブ

きりぎりす　平家七、福原落、萌ニ宿九月影、千草ニスダク蟋蟀（シツシユツ）のきりぎりす　（文選注　倶博士注）カ

きはどし　キハヤカ、キツパリ

きり　露霧　秋ノキレ云ヘド　万　朝露霧ニ八重山越エテホトヽギス　ソノハ十ヘヨリ鳴キテ過グナリ

経塚　経筒　考古学雑誌十三ノ九ノ五九八

忌中燈　考古学雑誌十三ノ十ノ六九八

共産主義　社会主義　狂言作者　天気集ノ二ノ一四三

女帯 加幡一全 新兵衛 陸布 長脇 四日本ハ上代 琴曲 ユトミヤ 箏曲

きさ 蟻 壁八 吾四ノ廿三

ぎちょう ぎッちょう 毬打 御製 清歌 北花文ノ二ノ三五

ちょう 蝶 ちょう 蝶 ちょう 蝶 典 謡ノ四四三 気味ッセイ

金紋先箱 きもほ ノ住ノ見ヨ 經木 さるだ さるだいと 見ヨ

欽差 百科ノ差使ハ九下 曲水 集中ざろく

雑煮酒 堂上方ノ元日ノ膳 昔ハ雑煮酒ノ後ニ 雑肉ニ代ヘテ 焼豆腐 より 焼キ熟酒ノ注 キタルヤキ タスキビル

菊の盃 殘 ノ ノ 人ノ 木 稿 ノ ノ 見 ノ

来 俳二百十三 狂歌 ザレウタ きさ六 ノ 三ノ 羽三ノ上

きりしたん 葡語 Christão 聊斎志異 孝義 劇 家 字典 家劇 家 戯 世 杜牧 西江 夜 士 詩 八 歳 ノ 歳 ノ 懇 亲 縫 義 真 戯 劇

サ之居 狂言ヲ 雜 劇ト云 之手 婦ニ 劇 婦ト 五ノ

きざはし きはを 見 食ハス 演 稿

菓 子 駄ノ 異名 きさ 蟻 きさ 蟻 ノ 住ノ

まるみ ぎる 君 実 実 俳ノ ちぶッせい 上来イブセシ シンキクサイ

銀行 百万塔 八号ノ古 板木ノ 外

玉 三王玉 刻昆布 百科ノ アラキヤニコンブ 三一一中

魚螺 きさ ふ ふ ノ

きさ 蟻 きさ 蟻 ノ さひ 蟻 レ ノ 俳ノ

松年文庫

官位ヲ
春明門朝
録「公家文
書稿中書
留三部ノ抜
密院謂ニ
位ヲ」

史記
韓隠
朝家

火中山密往来ノ定義ハ言ハ一候 武田高覧之後速可返
太平記覧九百五十一 侯 翻 世界弟 一三相告
省書 島津氏 相
相国 相国日記五ノ六
男 太宰帥 何府太宰
一 能谷梅 外青陵ノ能谷草ハ
清華出 小西清
日本大学 日本深 乳法書 外青陵
五右衛門 伝名 ハ
三条殿 小幸 家 ハ 空也 三条殿 草庵 東北 ハ 主 匿
九太夫 移 入 ハ 陸奥
くぐつ 外骨 婦人ニ
人さ、ぎ ハ 四ニ三ノ
其因果ニ因リテ種
直樹 ハ三ノ
直能 公家 衆 源 ハ
公家 吉原談 伊勢 私修 大元法 仏法者 然 家 不修之法也
公儀 西名 也 時 五 一本 侍 士 所 云 世間書 一本

田舎島 婿入(五雑組 会後女婿婿入ヲ謂フ)

草刈笛 ハ孔巻ロス深サス

(見足 活ル物語 侵のたん 数ヲ管絃 ハ巻ヘ)

(庭到 往来五月迄)

俱利迦羅紋

黄雪 唐紙十ノ六 谷ハル上 作リ唐紙十ノ四 皆形中子形ハ紋

人ま 阿西 唐紙十ノ七 人さけ いけ三

過飛ソ 過渡 駆カ 過渡 ハド 遠国 泡 茅場 梅カ香ヤ

元三日 直歩色葉集 元三日 毎始月始日始三月朔也 謂ヒ一一也

工面 天面 侯 侯的 餌 餌ヲ 貫目 ヤ

(上)

~~御楽 鷹 春 軒日録 寛正六年三月廿日「夜飯尾兵庫大夫一所ニ参公文之東 以前迄下野ニ秘仰也~~

公帖 又公文ニ三ノ五 侯ヲ見ヲ 鯨 久之良 辛家 清 ヲ折 十

空 侯 生 情 情 重 巡 三 侯 ナキ ヲ

人つくつぼ ラル (ヘ 任ヲ クツメカシテ 鳴立ル)

火合飛 火合 人ま まり けまり 合ハセル

人ろ ぜき 松ノ人つノ人つかさ ろ 火事 炎上

呵羅 仿 誤 Chlorofoorm 工面 約手

組子 組格 黄 形ノ意 鉄 カナ形 カナグツ

来 雅楽 ハ(来) ハ(行ツ) ん さし

人口 人口 拍 鳴 ハ ハ ハ ハ さうく ん 工面 約手 形 約手

クグル 潜 コグル入ル

黄塵 殿カ ここ ハ ス 紅塵 入ル

國 大ル 利

塵 辛家 清 入

虎口 ヒクチ 湯桶 ユトウ

大峯ノ場所 ヤマ

拾ノ 万四ノ五十三 件 雑言考二四四下 カミアゲダリ

熊襲皇師 雑言考二六三下 くらたに 紫 くみど

くび 頸 クビル くぬき 二八四上 くぼて くま隈 下

くも くめが くにとやたちのみこと くしび くだら

くはさ 二八五上 くきら くしざし くぬち 下 くだつ

くさめかきは くたす 二八六上 くれ くみがき 組垣 二八六上

くもで くもりび 二八八上 くまがし くしみたま 二八七上 くしろ 下

雲のはたて くぶち くにのうがひと 二八七上 くらのつかさ

くらびとめ くにみ 下 くものむかへ 二九一上 くらひもめ

回 陳簡齋侍御送腦文 日数四

過去 大小長者 きたくさく くだびれる ワルビル ヒルム

くきやか 脱り 組歌 百科ノ琴歌

くたかざ 口数 コトバカズ 言ノ多

くつ 可倍 言ヒツタヘ 逆倒(ヨミカヘ) 比ブト 直ルカ

(ヨミカヘ) 二三

くらはんかざは 国文帯 (文ヒツカヒ典ニアリ) 二九五

具注暦 国ノコヨミクヒ

外国 五葉神ノ二ノ六二ノ九行 草取 雑考四 四十ノ二ノ四ノ

木居取ル 清稜ノ木居ノ庭家ノ考

欽状 弘仁ノ九三 吾妻カヒ

回文 本朝文粋一 橘在列 草 アヲユクトキかさく

子文

愚妻 山妻 女刑妻 杉山孝門 三ノ典

くしろ 釧 手首ノカザリ 俳名ノ隠上ノ遣字解

銅くしろ 銅釧 銅ニロノクシロ

鐶 鈴くしろ 鈴ニ長ノ鈴ノ玉くしろ いまヲ組ニ通シテ一重二ニ三ニ輪ニシテ手首ニ巻ノ玉

石くしろ 碧玉巻釧

くつき 過差 天武紀十年 服制ノ分限ヲ超ユルコト禁ス

句題 一首ノ歌ノ中ノ名ノ如キ詞一句ヲ採リテ其句ヲ句ニ入ルモノ 下ノ句ヲ取出テ名ハ上句ニ入レ上句ハ下句ニ入レ

俱舎宝 奈良ノ東大寺ニ存ス

くち 唇 歯鉄鳥 歯鳥 治用ツヤヒワ

九方皮 紙中風 長屋 緒言 贅言

母衣ス サカムニトルニ用ヤリ 軍勢 勢トシテ 枯葉ノ俳ニ用アリ

九枚笹 松ノ葉ノ俳所 雲ハ方ニ 鳴雷モシバシトヨミテ刺雷ル

櫓ノ俳 櫓三櫓ノ注ニ云ヘリ

国 国ハ十七ノ三十八我カ天子カ国ヘ往ニタ

荒神松 一一棚 俳句 松

クルス 前注 Cross 十字架

元三大師 西京 仙翁ノ七ノ 大師

活人剣 殺人刀 殺人刀 俳諧ノ活人剣(松ノ葉)

冬籠 和漢 三才二一〇

限取 松ノ花クマヲ入レ 百秋ノ百秋クマ入レ 三月上ノ方ヲ

活業 ツク

くはし 細 細密ニ妙ナリ

くだりあま 下船 式部ノ日記

光明丹 百秋ノ百秋ノ中

滝田 高田ヲ見ル

五拾貫文
八二下財

異物御詮議

玄田牛一 擬人
名々大名ト五万石

見物記事 諸曲 其三代 天明ノ小説ニ
御ノ異四名人素真ノ名

下野老 ツマヒクニ 慶安 慶長 接見

源助 外貌ノ士 源五郎 外宅附五

下財 下オ六ノ下異カオ六ノ俗
藝大ヒキ ヒキ ヒキ五ノ

陰者

傾城 外貌 婦ノ三五

けいせい ひとこと けんどん

けさろ いき

ぜさ いき 大坂三ノ女

皆ぶ

他城ニ宣助以代 私女一人年後
十五男天公 私相別

一ケリしカ公 姉 ヒ 二年ノ白ヒ一所ニ等ノ天正十七年京終ノ邪馬ト沙ニ 野屋ヲ
ヲ聞ヤ 十三歳 島津 野

甲 横 乾児 等 屋 宇 所 等 ヒ 西 朝 議 ト 録 ニ 魏 忠 賢 柄 権
朝 臣 附 之 者 以 為 人 忠 賢 目 ニ 乾 児

儒者
清原宣
賢環翠
軒 文十
九段

[illegible]
假名 浄るり物語に昔々東くだり「けみやうハ浄ノ浄九郎じつみやうハ義
下行米 円光大師行状畫圖十三 経トテ生年十五ニナリナル」此役今興福寺ニ三人有之下行米
下人 [illegible]
下人 浄るり物語そとの笠「朝夕仕権ノけいんニハ御前近ク召ヨセテ」
元服 浄るり百廿八 けのもの 座敷十ノ三六
せのふつ 藤皆 [illegible] 寺島清
軒 武田道遥軒 信玄弟 乾之死 [illegible]園 惣右衛門 梅か香
異ニセザリキ けおとる 服のい けがし 孫 服の 猿(?)
敬白 服カ [illegible] けや子副 けやしトシテ形容 [illegible]

傷楽ノ酒
[illegible]一二六一上

描ニ
けれぞ
[illegible]

傷陀 歩行 [illegible]
験ノ證核 [illegible]楽 [illegible] 検校 [illegible] 文安五年 建業百科 [illegible]
謔怒 〈謔 [illegible] 詩小雅 [illegible] 字典 理之微妙者 [illegible]
継体 史記外戚世家 [illegible] 継体守文之君 [illegible] 謂嗣位也
先ざき [illegible] げにげにしき 座敷 [illegible] 四ノ十一
けおとる [illegible] けら [illegible] 服の [illegible]
けん 料理ノ [illegible] 勧賞 [illegible] 四十三ノ [illegible]
けから [illegible] 異ヒク [illegible] アラス [illegible]
外術 外法 [illegible] 服 着 [illegible]
未使ノケビハ [illegible] 服りに [illegible] [illegible]

元祿華文　大柄　浴衣地

本物ニハ　ソレ　ソウテカキテアリ

奉酒　考きみ　條ノ小唄ヲ真コ

軒　戸ノ脫

外科　傷科　典軍式　宮軍式

捲土重来　モリカヘス

源氏名　宮女ニ　ケル

間折石　ケニチウチ

刑脫

経文　奉時　奉仕

喧嘩　吾れ　吾れ　吾れ　吾れ

コロタカン

祭心無ゲ　松

華鬘　五衰ニ　興ア

のよい時でたために身は堅く味がよいのです、それからだんく腐敗期に傾いて来ます、魚はやはり「しゅんのものがおいしく」頂かう安うございます、それから「削り節」といふて煮干しを削つたあのは房州東海道方面で盛に製造されてゐます、これは一貫十六錢位で四五人の家族では一月半もまず非常に経済でみそ汁とか物菜ものゝだしにはかつをぶしよりずつと安くて味もよく経済もあります

▲四月七日午前十時▲

懸賞寫

厳譴　コハイケン

脫？

ハツロ

人日　人日ノ節ヲ見ル

殺日

脫？

磬　キヒウチナラシ

烟雨集　コノメけぶる

矯激

秘音士　秘音士

棒ノ遣ヒ方ハ　秘音士ノ

棒ノ遣ヒ方ハ　秘音士ノ

謠曲　謠曲　謠曲

元　支那ノ北部ノ海

凡ソ一國五十キロ

ケロリ　コロリ

けたし　蓋　繁（想像）アリサウナサセウ

けさ　僕人、契機（全部兵隊ニ日本風ニ流儀

幻覺（英語）　錯覚

教育　民心ニ得テ天下英才ヲ一一之ヲ

藝道　サガシラニ歩ク

今日ニゴロ　昨今

艦橋

元禄模様 大柄 浴衣モヤウ

ケンキョウ 本稿ニコル ツシサガテカキアリ

ケン奉 (奉酒ト云フ) 奉酒 ケンきゝみ 俳ノ小唄ヲ見ル

外科 瘍科 典薬式 宮薬式 軒 戸ノ脱

ゲビゲビし 解ラ ケビ ネ 搭工雇来 モリカヘス

ゲンチイし 間折石 ケンチウチ 源氏名宴 ニ ケツル

経主 奉職 乗仮 ケテ 牛ヤ メ 作脱

喧嘩 吾れ、発白六三 ケンカ 家鶏 コ、ロタカン

ケケレナソ物数稱ナ ケケネツ 物 集三「天上ト中ス」 ケツ 祭心無ゲ松

快楽 薩 物 集三「天上ト中ス」 天平無数セ ケツ 華鬘 五衰ニ典ハリ

けた 桁脱? ケタ

けいさつ 鶏日 人日 俳ヲ見ル 夜ル 脱? ケイ

けにんし 懸し 脱 今コノヲ ケイ

けが 畑 雑草 コノメけが 磬 キヒウチナラし

秘音士 狂言ニ 棒ヲ遣ヲ 新棒 ケイ 棒ヲ遣ヲ ケイ ケイ 秘音士ヲ

ケロリ コロリ 於費 ニ ケ 謡曲 殺生石 大和国ノ九ノ五十 元 支那ノ沈黙ノ海 凡ソ一国五十キ

けたし 基 案(想像) アリサウナサセウ 巌道 サガシラニ歩ク

けさ 僕人、契信 全新兵衛ニ 日本国土ニ流賊 今日ヨゴロ 昨今

幻覚 (英語ノ、、 錯覚 ケガ 鰹 ニ

教育 脳心上 浮天下英オ、ー、ー、之 脳 盗 ニ

希有傳 サルヘ 二三八行

御新傳 森

世話狂言 劇場 戲家ノ傳ヲ見ヨ

檢也 ケンヤ

下種 ゲシュ 唐人 國文業書ノ字法於考ノ二九六

家 ケ 古大將家 孔文ノ一四六一

月琴 ゲッキン 樂ノ六ノ上ノ十ウ

玄宣 西 翰四ノ二七九

下知 孔ノ乘ノ一二〇ノ三ウ

缺 ケツ 臥 ガ

松年 森もらや勢

公儀幕府（官位上三ツ位）

鉤 鉤九

濃茶

老ゼ 葉後

碁石 百八十

胡兎ノ子 羽子

小枝茶碗 百利 小碁ノ百利

ざき 後騎 松ノざき

乱世之役 蒙古襲来

音医ヲ 百利

講百利

公園 百利

五海道 江戸志 東海道中

吉加禾、古柄 百利字鏡

久我梨 百利ノ梨

國姿 百利ノ加

小菱 小菱 小菱

俵

天満宮 ナノ五 植

植

陵ガ

家庭科學

煉乳の製法と品の見別け方

星野佐紀氏（談）

煉乳（コンデンスド・ミルク）は牛から搾取つたばかりの生乳をクーラーで冷し、動物熱を去り牛乳特有の臭氣を取つてから夫に一定量の砂糖を加へて一度煮立て次に真空蒸發器で一定の濃度に入れて蒸發させそれを罐に入れて密閉したものです、ところが實際の製造に當つては牛乳には極めて微菌がつき易いので作業場は非常に潔淡にしなければ直に腐敗する練乳には少しの空氣が入つても固まらず又異物混一切出來ないのですから特別に同じ様なものたがやはり勞労があり

寛文年間 徳川家綱將軍の 時に植付け、延享年間吉宗將軍の時までに時々植繕し、又一八八七年には ルツ氏がこの理論に基いて電波の速度、波長を測定

内務省では差當りその衛生思想の啓發普及に資するため、既に東京・仙臺・福岡で姙産婦及び兒童に關する衛生講習會を開催したが、更に本年三月二十三日から同三十一日まで、九日間、大阪醫科大學で同樣な講習會を開催した、講師は大阪醫科大學教授、東京から出張した帝國大學、教授、榮養研究所長、内務省官吏等で、講習員は大阪府其他二府二十四縣から來會し、總計百四十七名（内衛生關係職員二十一名、教員四十七名、産婦産婆、看護婦四十三名、醫師十八名、その他二十五名）に講習修了者を出した。尚會期中、大阪市立産院、大王寺分院、大阪市立乳兒院、大阪市立兒童相談所、日本赤十字社大阪支部産院等を見學した

（3）

温計

毎日コロツケー

海老の

惣菜

海老を細く切り、別にいくつにも刻り裏形に切り、別にケシヤミーソースを作り牛乳にて煮し、醤、清酒を加へ、馬鈴薯を細て、裏漉にかけ、鍋に入れ玉子の黄身、牛乳、バタ少量にて、ころ火の上にてかたくなる迄練り、これに前の海老を入れ、適宜の大さにまるめ、メリケン粉、玉子、パン粉の順につけ、ヘットの煮たぎつる中に入れてあげる

四倉區石京町一〇新一 本

本鬼 油粕 木モトを怖チ

車走 コヒバカキ

海鼠 海蛆の海蛆膳

狭衣、二上、情つ姙娠りふ

金、秋 イツリニナリゾミヌ

月 ヨ大ノ是バカリ今

氷 蒸義ル 凍ル、ココロ、コイタ

五体 ノ四七六上

姑射山人 廿八、四八中

小童 廿中

後宴 廿中

大正十二年四月七日

内務省では差當りその衛生思想の啓發普及に資するため、既に東京・仙臺・福岡で姙産婦及び兒童に關する衛生講習會を開催したが、更に本年三月二十三日から同三十一日まで、九日間、大阪醫科大學で同樣な講習會を開催した、講師は大阪醫科大學教授、東京から出張した帝國大學、教授、榮養研究所長、内務省官吏等で、講習員は大阪府其他二府二十四縣から來會し、總計百四十七名（内衛生關係職員二十一名、教員四十七名、産婦産婆、看護婦四十三名、醫師十八名、その他二十五名）に講習修了者を出した。尚會期中、大阪市立産院、大王寺分院、大阪市立乳兒院、大阪市立兒童相談所、日本赤十字社大阪支部産院等を見學した

されたもので、苗木は大和の吉野、常陸の櫻川などから求めたものといふことである。株數は千八百五十本。

向島土手――枕橋から千住掃部宿まで一里半の間。四代將軍家綱の時に植初め、八代將軍吉宗の時までに漸次植繼がれたが、その後は幕府の手を離れて土地の有志の手で植繼がれて今日に及んだ。株數千八百本。

荒川土手――千住掃部橋から鹿濱までの一里三十丁、水路工事のため、往年の面影の三分の一を失つたやうである。株數千五百本。

三鷹高井戸上水端――井ノ頭公園の後方、三鷹村上高井村下鷹井村附近。千

小岩田 五丁。千

上板橋 十丁。千

本の時植 八百七十

清德

實に甘

倒薯るイ

時代的の

グリエル

に於て高

芸に無

たのであ

クスウェ

して、今

在を確言

電波の速度、波長を測定し、赤電磁波は反射偏極等全く光波及び熱波と同一の現象を呈することを實證し得たのであるが、その實際的應用はこの一青年に依て先鞭を著けられたのである。

電波の理論、無線電信電話の技術的作用は、茲には省略するが、要するに、高周波電流即ち正負電流の方向が一秒間に數萬乃至數百萬回變換するものは一秒三十萬キロメートル即ち光と同一の速度で空間に傳播する。かゝる高周波電流の發生方法には、火花式・孤光式・發電機式・眞空管式等があり、又その受波に用ゐる檢波器にもコヒラー・磁石裝置・液體裝置・鑛石・眞空管等の各種があるが、將來は送受波共に眞空管を專用するに至ることと思はれる。

無線電信の急激な發達に對して、無線電話は幾多學者の研鑽努力に依り近年漸く完成するに至つたものといふことが出來る。これは、無線電話に於ては、音波に依つて電波を變形しなければならないこと、從つて先づ純粹に同一波形を持續する所謂不減衰電波を必要とすること等のため、衰減電波に依つても相當の成績を擧げ得る無線電信よりも發達が遲れたのである。しかし、一九〇四年フレミング氏が發明し、ド フォレスト氏が改良を加へた眞空管の研究應用が進歩して、單なる檢波器から送波用に適するに至つて純粹持續電波發生の難關を打破し得た。

一九一五年には、既に合衆國アーリントンとハワイとの間五〇〇〇マイル並にアーリントン・パリ間の通話試驗の成績良で好あつたと言はれてゐるが、眞空管の發達に依り小電力で言遠距離通話が可能となり、昨年合衆國の西北電氣會社は七キロワットでローサンジェルスからハワイへの通話に成功し、最近イギリス、フランス等に於ては、素人無線裝置に依て合衆國のブロードカーストチング放送無線電話を聽取することが流行してゐる。

無線電話は、無線電信と同じく一般の通信機關として航海船舶・飛行機・汽車等と固定地點との連絡に用ゐる、或は國内又は國際間の通話に利用し得、且電信と違つて通話者が直接用便を果し得る特長があり、これ等の用途に於てすべて電波通信は本質上空間を無限に擴大するものであるから、多數通信の間に混信妨害を生じ易く、且秘密を確保し難い。從つて有線電話の如く無數の人が同時に各所で通話するといふことは、今日の科學の程度に於ては到底期待し得ないのである。

然るに、この電波に擴散性を利用し、單純な通信機關としての領域を超えた新用途が無線電話に表れ來つた。それは、今世界を通じて流行の焦點となりつゝある放送である。放送は、無線受話機を所有する一般公衆に對し、新聞・音樂・講演から說教・相場・柳伽話等に至るまですべて音波に依つて媒介し得る事項を無線電話で送り出し、聽取せしめるのであつて、換言すれば無線電話に依る新聞紙・音樂會・演說會乃至學校である。

放送は、一九一九年秋、合衆國に於て發生したといはれてゐるが、當時同國には數萬の玩具的素人用の無線電信機裝置者があつた。放送が開始せられるに至つて、從來の青少年の玩具は一變して家庭の娯具となり、一方機械賣込の關係上製造會社が放送局を設置するもの續出したので、茲に熱狂的な流行を生じ、過ぐる一年間に受信機販賣數が百萬箇以上に上り、現在の放送局數が六百、受話者が百五十萬と稱せられてゐる。

器を取付

公開場に

に盛況を

講會に於

するため

るのを

は、昨秋

送事業

局を建

パーミ

は既に

を放送

受けた

するとい

ル塔大

とを放送

力なも

聽取し

はベルリ

ルハウ

送を實

種定で

日本の

には既

と附近

一月一日

と陸上の

る有線

電氣試驗

種の無線

米に比し

共に遜色

けてゐる

實施を

濟等各

資する

早晩我

木魅（赤）　油粕　木玉トを怖ヂヌ小家ノ子供ども
車蛙　[illegible]　さくら[illegible]　數日[illegible]
[illegible]　コナスミニ同じ　御膳　海人[illegible]
六　海[illegible]　海蛆り、海蛆膳　小[illegible]　小坊主
御[illegible]　狭衣二、上[illegible]　[illegible]
[illegible]　金、秋[illegible]　月[illegible]　[illegible]
[illegible]　狂言記鬼[illegible]　本[illegible]
氷　[illegible]　姑射山人　廿[illegible]
五体　[illegible]ノ四七六上　[illegible]
[illegible]　集　後宴　集中

局と聯絡を保ちて遂行されれば可なりとの見解を持してゐる

工場規則答申
工業倶樂部案

内務省では差當りその衛生思想の啓發普及に資するため、既に東京・仙臺・福岡で姙産婦及び兒童に關する衛生講習會を開催したが、更に本年三月二十三日から同三十一日まで九日間、大阪醫科大學で同様な講習會を開催した。講師は大阪醫科大學教授、東京から出張した帝國大學教授、榮養研究所長、内務省官吏等で、講習員は大阪府其他二府二十四縣から來會し、總計百四十七名（内衛生關係職員二十一名、教員四十名、姙婦、産婆、看護婦四十三名、醫師十八名、その他二十五名）に講習修了者を出した。尚會期中大阪市立産院天王寺分院大阪市立乳兒院大阪市立兒童相談所日本赤十字社大阪支部産院等を參觀した。

東京とその近郊の櫻

東京帝國大學理學部附屬植物園　室田新次郎

東京近郊で櫻の名所と云はれてゐるのは、多くは徳川幕府の中頃に起つたもので、それが次第に發達して晩年には、上野、向島、飛鳥山など各所に咲亂れて江戸の末期を飾つたが、江戸が東京と代つて今日の發展を見るに至つた間に、幾多の櫻の名所も、いろ／＼の工事や虫害などのためにその面目を傷けられたり、增植せられ保護を受けてそれを恢復したり、その境遇もいろ／＼變遷があつたのである。

上野公園――二百五十年前の延寶・天和の頃の花見記錄にその名が見える。現在の株數約三千五百本。

小合・中川堤――南葛飾郡小合土手から猿又方面・南足立郡六つ木の中川附近、明治二十年頃から植付けられたものらしくあまり世間に知れ居らぬが、株數は二千百本ばかりある。

小金井――小平村小川水衛所から小金井橋を經て櫻橋までの一里二十丁。寛文年間徳川家綱將軍の時に植付け、延享年間吉宗將軍の時までに時々植繼がれたもので、苗木は大和の吉野、常陸の櫻川などから求めたものといふことである。株數は千八百五十本。

向島土手――枕橋から千住掃部宿まで一里半の間。四代將軍家綱の時に植初め、八代將軍吉宗の時までに漸次植繼がれたが、その後は幕府の手を離れて土地の有志の手で植繼がれて今日に及んだ。株數千八百本。

荒川土手――千住掃部橋から鹿濱までの一里三十丁、水路工事のため往年の面影の三分の一を失つたやうである。株數千五百本。

三鷹高井戸上水端――井ノ頭公園の後方、三鷹村上高井村下高井村附近。千四百本。

江戸川堤――南葛飾郡小岩村小岩田から金町村小向までの一里二十五丁。千三百五十本。明治三十年頃植付けられたものらしい。

新小金井――北豊島郡長崎村上板橋中新井附近の千川用水端一里三十丁。千百五十本。

飛鳥山公園――八代吉宗將軍の時植ゑられその後時々植繼がれた。八百七十本。

無線電話

遞信書記官　今井田清德

一八九五年（明治二十八年）は、實に廿世紀文明の一つの萌芽を橄欖樹薫るイタリアの地に擡頭せしめた劃時代的の年である。この年、二十歳の青年グリエルモ　マルコーニ氏はボロニャに於て高周波電流の空間傳達に成功し、玆に無線電信無線電話の濫觴を作つたのである。これより先一八六七年にマクスウェル氏はその電磁氣理論を發表して、今日無線通信に用ゐる電波の存在を豫言し、又一八八七年にはヘルツ氏がこの理論に基いて電波の速度・波長を測定し、亦電磁波は反射偏傾等全く光波及び熱波と同一の現象を呈することを實證し得たのであるが、その實際的應用はこの一青年に依て先鞭を着けられたのである。

電波の理論、無線電信電話の技術的作用は、玆には省略するが、要するに、高周波電流即ち正負電流の方向が一秒間に數萬乃至數百萬回變換するものは一秒三十萬キロメートル、即ち光と同一の速で空間に傳播する[illegible]電流の發生方法には、火花式・孤光式・發電機式・眞空管式等があり、又その受波に用ゐる檢波器にもコヒラー・磁石裝置・液體裝置・鑛石・眞空管等の各種があるが、將來は送受波共に眞空管を專用するに至ることと思はれる。

無線電信の急激な發達に對して、無線電話は幾多學者の研鑽努力に依り近年漸く完成するに至つたものといふことが出來る。これは、無線電話に於ては、音波に依つて電波を變形しなければならないこと、從つて先づ純粹に同一波形を持續する所謂不衰滅（アンダンプト、ウエーブ）電波を必要とすること等のため、衰滅電波に依つても相當の成績を擧げ得る無線電信よりも發達が遲れたのである。しかし、一九〇四年フレミング氏が發明し、ド　フォレスト氏が改良を加へた眞空管の研究應用が進歩して、單なる檢波器から送波用に適するに至つて純粹持續電波發生の難關を打破し得た。

一九一五年には、既に合衆國アーリントンとハワイとの間五〇〇〇マイル並にアーリントン・パリ間の通話試驗の成績良で好あつたと言はれてゐるが、眞空管の發達に依り小電力で遠距離通話が可能となり、昨年合衆國の西北電氣會社は七キロワットでローサンジェルスからハワイへの通話に成功し又最近イギリス、フランス等に於ては、素人無線裝置に依て合衆國の放送（ブロードカースチング）無線電話を聽取することが流行してゐる。

無線電話は、無線電信と同じく一般の通信機關として航海船舶・飛行機・汽車等と固定地點との連絡に用ゐ、或は國内又は國際間の通話に利用し得、且電信と違つて通話者が直接用便を果し得る特長があり、これ等の用途に於ても既にかなり實用を見るのであるが、すべて電波通信は本質上空間を無限に擴大するものであるから、多數通信の間に混信妨害を生じ易く、且秘密を確保し難い。從つて有線電話の如く無數の人が同時に各所で通話するといふことは、今日の科學の程度に於ては到底期待し得ないのである。

然るに、この電波の擴散性を利用し、單純な通信機關としての領域を超えた新用途が無線電話に表れ來つた。それは、今世界を通じて流行の焦點となりつゝある放送（ブロードカースチング）である。放送は、無線受話機を所有する一般公衆に對し、新聞・音樂・講演から說教・相場・御伽話等に至るまですべて音波に依つて媒介し得る事項を無線電話で送り出し、聽取せしめるのであつて、換言すれば無線電話に依る新聞紙・音樂會・演說會乃至學校である。

放送は、一九一九年秋、合衆國に於て發生したといはれてゐるが、當時同國には數萬の玩具的素人用の無線電信機裝置者があつた。放送が開始せられるに至つて、從來の青少年の玩具は一變して家庭の要具となり、一方機械賣込の關係上製造會社が放送局を設置するもの續出したので、玆に熱狂的な流行を生じ、過ぐる一年間に受信機販賣數が百萬箇以上に上り、現在の放送局數が六百、受話者が百五十萬と稱せられ

內務省では差當りその衛生思想の啓發普及に資するため、既に東京・仙臺・福岡で姙產婦及び兒童に關する衛生講習會を開催したが、更に本年三月二十三日から同三十一日まで九日間、大阪醫科大學で同様な講習會を開催した。講師は大阪醫科大學教授、東京から出張した帝國大學教授、榮養研究所長、內務省官吏等で、講習員は大阪府其他二府二十四縣から來會し、總計百四十七名(內衛生關係職員二十一名、教員四十名、姙婦、產婆、看護婦四十三名、醫師十八名、その他二十五名)に講習修了者を出した。尙會期中大阪市立產院天王寺分院大阪市立乳兒院大阪市立兒童相談所日本赤十字社大阪支部產院等を參觀した。

東京とその近郊の櫻

東京帝國大學理學部附屬植物園　室田新次郎

東京近郊で櫻の名所と云はれてゐるのは、多くは德川幕府の中頃に起つたもので、それが次第に發達して晩年には、上野、向島、飛鳥山など各所に咲亂れて江戶の末期を飾つたが、江戶が東京と代つて今日の發展を見るに至つた間に、幾多の櫻の名所も、いろ〳〵の工事や虫害などのためにその面目を傷けられたり、增植せられ保護を受けてそれを恢復したり、その境遇もいろ〳〵變遷があつたのである。

上野公園――二百五十年前の延寶・天和の頃の花見記錄にその名が見える。現在の株數約三千五百本。

小合中川堤――南葛飾郡小合土手から猿又方面・南足立郡六つ木の中川附近。明治二十年頃から植付けられたものらしくあまり世間に知れ居らぬが、株數は二千百本ばかりある。

小金井――小平村小川水衛所から小金井橋を經て櫻橋までの一里二十丁。寬文年間德川家綱將軍の時に植付け、延享年間吉宗將軍の時までに時々植繼がれたもので、苗木は大和の吉野、常陸の櫻川などから求めたものといふことである。株數は千八百五十本。

向島土手――枕橋から千住掃部宿まで一里半の間。四代將軍家綱の時に植初め、八代將軍吉宗の時までに漸次植繼がれたが、その後は幕府の手を離れて土地の有志の手で植繼がれて今日に及んだ。株數千八百本。

荒川土手――千住掃部橋から鹿濱まで一里三十丁、水路工事のため往年の面影の三分の一を失つたやうである。株數千五百本。

三鷹高井戶上水端――井ノ頭公園の後方、三鷹村上高井村下高井村附近。千四百本。

江戶川堤――南葛飾郡小岩村小岩田から金町村小向までの一里二十五丁。千三百五十本。明治三十年頃植付けられたものらしい。

新小金井――北豐島郡長崎村上板橋中新井附近の千川用水端一里三十丁。千百五十本。

飛鳥山公園――八代吉宗將軍の時植ゑられその後時々植繼がれた。八百七十本。

無線電話

遞信書記官　今井田清德

一八九五年(明治二十八年)は、實に廿世紀文明の一つの萠芽を橄欖樹薫る**イタリア**の地に擡頭せしめた劃時代的の年である。この年、二十歲の青年グリエルモ　マルコーニ氏はボロニャに於て高周波電流の空間傳達に成功し、茲に無線電信無線電話の濫觴を作つたのである。これより先一八六七年にマクスウェル氏はその電磁氣理論を發表して、今日無線通信に用ゐる電波の存在を豫言し、又一八八七年にはヘルツ氏がこの理論に基いて電波の速度・波長を測定し、且電磁波は反射偏極等全く光波及び熱波と同一の現象を呈することを實證し得たのであるが、その實際的應用はこの一青年に依て先鞭を著けられたのである。

電波の理論、無線電信電話の技術的作用は、茲には省略するが、要するに、高周波電流卽ち正負電流の方向が一秒間に數萬乃至數百萬回變換するものは一秒三十萬キロメートル、卽ち光と同一の速で空間に傳播する、かゝる高周波電流の發生方法には、火花式・孤光式・發電機式・眞空管式等があり、又その受波に用ゐる檢波器にもコヒラー・磁石裝置・液體裝置・鑛石・眞空管等の各種があるが、將來は送受波共に眞空管を專用するに至ることと思はれる。

無線電信の急激な發達に對して、無線電話は幾多學者の研鑽努力に依り近年漸く完成するに至つたものといふことが出來る。これは、無線電話に於ては、音波に依つて電波を變形しなければならないこと、從つて先づ純粹に同一波形を持續する所謂不衰滅(アンダンプト、ウエーブ)電波を必要とすること等のため、衰滅電波に依つても相當の成績を擧げ得る無線電信よりも發達が遲れたのである。しかし、一九〇四年フレミング氏が發明し、ドフォレスト氏が改良を加へた眞空管の研究應用が進步して、單なる檢波器から送波用に適するに至つて純粹持續電波發生の難關を打破し得た。

一九一五年には、既に合衆國アーリントンと**ハワイ**との間五〇〇〇マイル並にアーリントン・**パリ**間の通話試驗の成績良で好あつたと言はれてゐるが、眞空管の發達に依り小電力で言遠距離通話が可能となり、昨年合衆國の西北電氣會社は七キロワットでローサンジェルスからハワイへの通話に成功し又最近**イギリス**、**フランス**等に於ては、素人無線裝置に依て合衆國の放送(ブロードカースチング)無線電話を聽取することが流行してゐる。

無線電話は、無線電信と同じく一般の通信機關として航海船舶・飛行機・汽車等と固定地點との連絡に用ゐ、或は國內又は國際間の通話に利用し得、且電信と違つて通話者が直接用便を果し得る特長があり、これ等の用途に於ても既にかなり實用を見るのであるが、すべて電波通信は本質上空間を無限に擴大するものであるから、多數通信の間に混信妨害を生じ易く、且祕密を確保し難い。從つて有線電話の如く無數の人が同時に各所で通話するといふことは、今日の科學の程度に於ては到底期待し得ないのである。

然るに、この電波の擴散性を利用し、單純な通信機關としての領域を超えた新用途が無線電話に表れ來つた。それは、今世界を通じて流行の焦點となりつゝある放送(ブロードカースチング)である。放送は、無線受話機を所有する一般公衆に對し、新聞・音樂・講演から說教・相場・御伽話等に至るまですべて音波に依つて媒介し得る事項を無線電話で送り出し、聽取せしめるのであつて、換言すれば無線電話に依る新聞紙・音樂會・演說會乃至學校である。

放送は、一九一九年秋、合衆國に於て發生したといはれてゐるが、當時同國には數萬の玩具的素人用の無線電信機裝置者があつた。放送が開始せられるに至つて、從來の青少年の玩具は一變して家庭の要具となり、一方機械製造の關係上製造會社が放送局を設置するもの續出したので、茲に熱狂的な流行を生じ、過ぐる一年間に受信機販賣數が百萬箇以上に上り、現在の放送局數が六百、受話者が百五十萬と稱せられてゐる。受話機も家庭用以外に擴大器(マグナボックス)を取付けて、學校・工場・カフェー等の公開場に盛に利用してゐる。その如何に盛況を極めつゝあるかは、目下同國議會に於て無線通信の混信妨害を排除するため無線通信取締法を審議してゐるのを見ても明かである。**イギリス**では、昨秋無線機械製造會社連合して放送事業經營の特許を受け、八箇の放送局を建設する豫定であるが、**ロンドン**、バーミンガム・マンチェスター等の六局は既に開局して、每夜氣象・新聞・音樂等を放送してゐる。受信機の許可證書を受けた者が本年一月末には約四萬に達するといふ。**フランス**は有名なエッフェル塔大無線局で每日氣象を數回と音樂とを放送してゐるが、これは極めて强力なもので、アルジェリヤにおてさへ聽取し得るとのことである。又**ドイツ**はベルリン郊外のケーニヒス、ヴュステルハウゼン大無線局を始め數箇所で放送を實施し、この四月には全部完成の豫定である。

日本の無線電話を見ると一九一一年には既にTYK式の發明があり、鳥羽と附近島嶼の連絡に實用され、又本年一月一日からは神戶港に於て碇泊船舶と陸上の電話加入者相互の間を連絡する有線無線電話接續も開始され、更に電氣試驗所では福岡と釜山との間で種種の無線電話試驗を行ふてゐる等、歐米に比して技術上の研究・實地の應用共に遜色なく、寧ろ或實用は先鞭を著けてゐるのである。唯放送事業は未だ實施を見ないのであるが、娛樂・教養・經濟等各方面に亙つて民衆の向上活動に資すること多大であるこの新用途は、早晩我國にも流行するだらうと思はれる。

改正された暦について

東京天文臺

東京天文臺編纂の暦が本邦略暦とも今年から改正されて、その體裁は、すつかり目新らしいものに代り體裁と共に内容もまた餘程面目を改めて、天文學上の事柄が多く盛んだ。その改正された主要事項を列記してみると、次の通りである。

「大正十二年暦」の中では

一、卷首に西洋年號「西暦一九二三年」を載せた。

二、毎月の欄内に日の最近最遠、或星の合、衝、矩、離隔等の諸現象と、毎月一日十六日（二月に限り十五日）午後八時に東京天文臺の子午線を通過する主要な星座の名とを載せた。

三、毎日の行で日の赤緯の値を分に止めた。

四、各地の日の出入時刻の表に新に大連、八丈島、小笠原島、古宇島の四箇所を加へた。

五、薄明、日暮の時刻と日の出入方位は別表にし、毎月一日、十六日（二月に限り十五日）の値をかゝげた。

六、日月食の表には食の方向を角度で表し、更に臺北、東京、札幌等の各地に於ける食の圖を添へた。

七、春分、夏至、秋分、冬至並に節氣、雜節項で、雨水、啓蟄、清明、穀雨、小滿、芒種、夏至、小暑、大暑、立秋、處暑、白露、秋分、寒露、霜降、小雪、大雪、冬至、小寒、大寒の十二節氣と春秋二季の「土用」とを掲き、時刻は「春分、夏至、秋分、冬至」だけについて載せた。

八、各種暦年及び年の始の項に支那民國暦、遠羅暦、ユリウス暦、回々暦の紀元年數と年の始とを載せた。

九、世界各地の標準時の表には、本邦中央標準時正午に於ける主要な各地の標準時の値を載せた。

十、各地の氣候表には、杭州、沙市の二箇所を省き、中江國、硫黄、東京、鹿崎の四箇所を加へた。測候所の順序は支那、滿洲、臺灣、朝鮮、九州、四國、本州、北海道、樺太の區劃に依つた。統計には大正九年までの年を用ゐた。

「大正十二年略本暦」の中で改正された事項は

一、卷首に西洋年號を載せた。

二、二十四節氣と雜節については本暦と同じやうに改正し、「春分、夏至、秋分、冬至」に限りその時刻を毎日の行に載せた。

三、各種暦年及び年の始の項を新に加へた。

四、毎日の行に日の最近、最遠と、或星の諸現象とを載せた。

五、毎月の頁の末行に、一日、十六日（二月に限り十五日）の日出、日入、晝間、夜間、薄明、日暮の時刻と、午後八時に東京天文臺の子午線を通過する星座の名とを載せた。

六、毎日の行に月の出入の時刻を載せた。（夜間の分は太い數字を用ゐてある）

七、官國幣社例祭日は別表として、日の順に掲げた。

八、たゞまき、季節表を廢止した。

九、本暦に載せた諸表から、主要な地を選んで新に各地の氣候表を加へた。

十、新に最近百年年代表を加へて、各年の神武天皇即位紀元年數、西暦年數、干支及び大正十二年前の年數を掲げた。

十一、[illegible]年號の元年に相當する神武天皇即位紀元年數ならびに西暦年數とを載せた。

十二、度量衡表には、メートル法、尺貫法及びヤードポンド法の比較を示した。

右のやうに、從來のものに比較すると、極めて多色彩を增し、天體の事情なども幾分詳しく暦の面にあらはれて來た。次に暦に記入された星座について簡單に説明しよう。恒星は遠方と遠つて相互の位置が殆んど變らないから、適宜に天空を區劃し、數多の恒星をその内に含ませることが出來る、かゝる區劃を星座と云ひ、現に學者の間に行はれるものが八十餘ある。この中で暦に記したのは三十三で、これを黄道の上及びその北方と南方とを區別するとたの通りになる。

（黄道星座）　牡羊・牡牛・雙子・蟹・獅子・乙女・天秤・蠍・射手・山羊・水瓶・魚

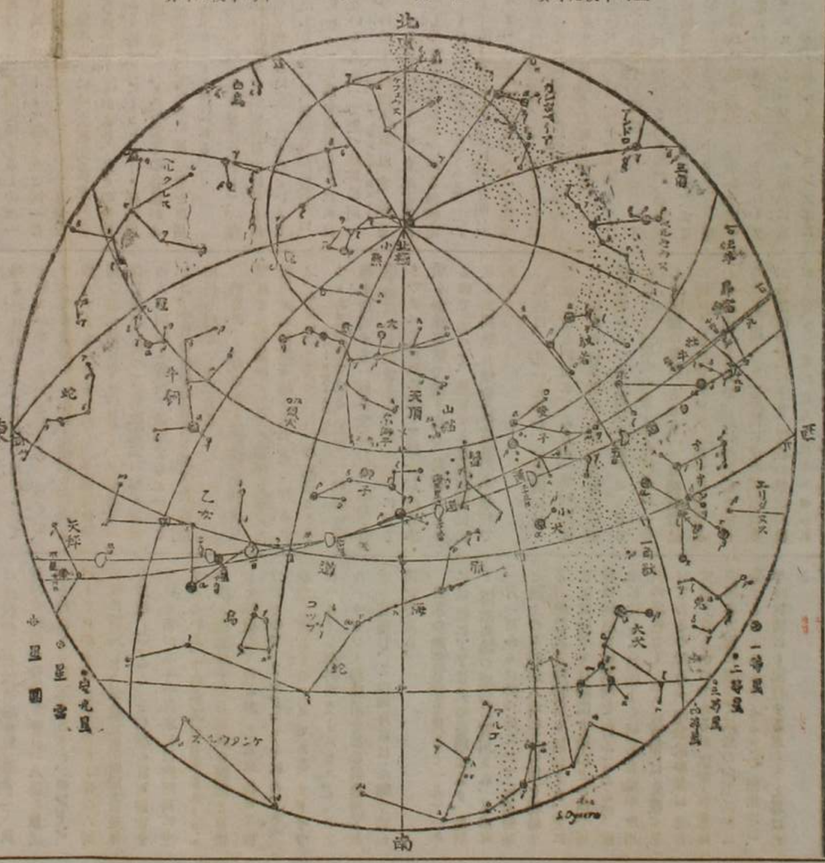
（北方星座）　大熊・アンドロメダ・カシオペイア・ペルセウス・御者・牛飼・冠・蛇遣・ヘルクレス・琴・鷲・白鳥・ペガスス・

（南方星座）　鯨・エリダヌス・オリオン・大犬・アルゴ・小犬・ケンタウルス・南の魚

小熊座は主要な北方星座の一であるけれど、年中どの時刻にも子午線の中に見えるから、特に暦の中には記してない。星座の位置とこれに屬する恒星等は恒星圖「四月天」に詳しく而してある。

四月の天

上旬午後九時頃　中旬午後八時頃



五合 祇園 俳ざざむ

五合 扶持

棚杖 談文「榮」予也

石盛 入レル

告陵使 入レル

ちまき 雅考二九ノ上

ちまき 雅考三ノ五上

ちまき 雅考三ノ三上

心の関 雅考三ノ二下

ちち 旧今昔 心持

九二重 ゴ三章 千句(慶安) 建テコヅミタル九里ノ四

孤 廿ノ四九ノ下 稲荷

ちちなし 浮穢ノコトナシ ブニヨリ

固体 コヲイタイヲ 移ス 百科ニ英語ヨリ

口諺 イサカヒ コトバアラソ

年ヲ経ス 浮穢ノ 殊穢ノ塩 百

東京天文臺報告 第二卷 第三號 日本天文學會 大正十年七月廿五日 發行

木鬼 油粕 木玉トモ 怖ル

車走 ハルル

言葉 コトバガキ

ちち コナスミニ同ジ

ちち 海鼠 海蛆 海蛆腸 海蛆ノ海蛆腸

海蛆 海蛆ノ海蛆腸

海蛆 コヒイヒ

海蛆 海蛆ノ海蛆腸

海蛆 海蛆ノ海蛆腸

海蛆 海蛆ノ海蛆腸

おもたい　姑蘇書　首明ノ呉王フウノ

胃法　胃肚　美味佳肴　雑用　御所表ノ改ノ一ノ三ノ二ノ平家ノ末

虚妄　子　ナラミヤコヲネハ　誰カ子ノ

乞索壁以　乞索ノ沙ノ二ノ九ノ三ノ盛衰記　口腹

金数　老女ノ十三ノ九ノ六ノ四　古墳　四ノ十ノ十ノ七ノ

さとうた　第曲　琴曲

戸主　サガケンジニ典アリ

さゝろぐるし心苦　きのどく源　さゝし保ニ典アリ　おまのはい　物類称呼　酒

さぞ〜　下来ラ城　高麗楽　三韓渡ル

拂　本和機ニ典アリ　教鄭　三ノ入ル　杉

ざるのくらど　三位中将

語原語源

小松茅　小松村ヨリ出

越　後撰恋三　イ　後撰恋三　松ヶ浦ヲ　ずたずた　雑駁　腰障子　腔板ノ器

来イ　伊　伊ノ三ノ五ノ十ノ九ノ五典

浪ヲ　ずつぐ　ユキナシ　コツナシ

侍所　保　さノ六ノ三四ノ七ノ

コムパニヤ　菊池　Compania　會

氷砂糖　氷糖　氷砂糖　氷糖　コンフィサン　菓　Confiseo　懸物

ちどぢぼう　琴柱棒　ちぢまた保ノ

小胡桃　澤胡桃ヨリ

ちもりづ　隠虎　コモリ虎　強盗ノ

ちが　古雅　サビ

ちまね　小札　札ノ保ノ

コールタール　百科さぐめ九〇〇ノ

構成國ハ其貢納ハ擬赤右郡 郡三千九六

蹴コウル 俗ノ一九三ト サ(ぢん)

胡國 胡人 國文業代言ノ宇治拾遺ノ三一二

權參議 參議ノ俗ヨー

骨張 丸ノ兵ノ一。丸三ノ方

さい 濃 アフナッかしい
ナツッかしい コマかいコマさい